

志摩の正月行事（資料1）

高橋 六一

はじめに

志摩はいろいろと興味を覚える所である。『万葉集』に歌われた故地、伊勢神宮の祭祀との関わり、折口信夫が「妣が国」論を展開する契機となった地、などなどである。そこにいだけ続けた一種の望郷感には、古典と民俗学の会編『伊雑宮の御田植祭』（白帝社、昭55刊）のための採訪でまず満たされた。そして「立神」信仰を追うようになってふたたび湧きおこった。昭和五十八年二月三日、熊野からの帰途にあわただしく立神・大王岬を見て廻った。その年末十二月三十一日から昭和五十九年一月五日まで、波切・安乗・鵜方・立神の正月行事を友人二人とともに見た。大きな感動を得た。ところが採訪の整理を始めてみると不備な点が多いことに気付き、昭和六十年一月二日から四日まで友人三名（一部家族連れ）とまた出かけた。採訪資料は一九〇枚に達した。そうした中から各行事の概略を次のように発表した。

志摩の春―立神のヒッポロ神事

「大東文化」第三五七号（大東文化学園、昭59―六刊）

波切―名告り注連切り火祭り

歌誌「人」一九八四年九月号

安乗―ミタナ神事と翁祭り

歌誌「人」一九八四年十月号

志摩―立神のヒッポロ神事

「文科報」11（本学文科国文専攻、昭60―三刊）

このうちの「文科報」ができたところで、お世話になった立神の宇気比神社宮司平古周氏に一冊をお送り申しあげ、あわせて神楽詞について御質問申しあげたら、さっそく古記録をお送りくださった。それが「当村鎮座宇気比社神事概要」である。読み進めてみると、これがヒッポロ神事の理解のためはもとより、広く神楽研究のためにも、たいへん貴重な文献であることがわかった。幸いにも公表をお許しいただいたので関連文書とともにここに掲載し、あわせて各行事の状態を

日録・次第順に記すことにした。途中に聞き書きが入れられている。

一、波切―名告り注連切り火祭り

* 大王町波切

* 昭和五十八年十二月三十一日～昭和五十九年一月一日。晴。

○ 午後七時 波切漁業協同組合

建物の内外に子どもがおおぜい集まっている。おとなの役員たちが二階で会議中。

○ 午後七時半

集まった子どもたちに一冊ずつノートが配られる。赤地に黒襟の半纏を上衣に、下はずぼん、首に赤鉢巻をかけ、手に弓張り提燈を持ったおとな。提燈には「出口御山神」と書いてある。反対側に「波切漁業協同組合」と書いてあり、それぞれに何組と番号が付いている。

(組数は) 二十四組まで。ここはまだ隣保制度が残っていて二十四町までであるが、センドサンが足らんもんで、掛け持ちのこともある。

(センドウは) 二十名くらいでねえかな。(子どもは) 小学校二年生から中学三年生まで。(赤い半纏を着ている人は) センドウです。

(船の?) ええ。(出口御山神というのは) いちばん最後に、注連を切る行事がある。そこに祀ってある神さんが出口御山神さん。

漁協の玄関前で、センドウの先唱で「ヨイヨイヨイ」、皆が同じに唱えて氣勢をあげる。続いて(以下、セはセンドウ、子は子どもたちを表わす)、

セ「アータラー」

子「シーノー」

セ「トーシノー」

子「トウシュサイワイサイワイ」

セ「波切漁業協同組合会長サンノシアワセゴトニハー」

子「イチバーンヨー」

セ「……ミナサンシアワセゴトニハー」

子「イチバーンヨー」

セ「……ダイリョウゴトニハー」

子「イチバーンヨー」

セ「……ダイリョウゴトニハー」

子「イチバーンヨー」

セ「……海上安全ゴトニハー」

子「イチバーンヨー」

セ「……交通安全ゴトニハー」

子「イチバーンヨー」

セ「……ゴトニハー」

子「イチバーンヨー」

セ「……ダイリョウゴトニハー」

子「イチバーンヨー」

セ「……チョウメンゴトニハー」

子「イチバーンヨー」

セ「……ソロボンゴトニハー」

子「イチバーンヨー」

セ「……ソロボンゴトニハー」

子「イチバーンヨー」

セ「タイシヨウタノシヤア」

子「モチヤケモチヤケア」

○ 午後七時四十分

それぞれ組ごとに町に散らばって行く。提燈を持ったセンドウにそれぞれの組の子どもが付いて行く。道々、センドウの「ハライヤア」の声に子どもたちが「ハライヤア」と復唱。家々は傾斜地にあるから坂が急で、道は細く入り組んでいる。

A家（以下、十町の組に付いて行く）

セ「ヨイヨイヨイヨイ」

子「ヨイヨイヨイヨイ」

セ「アータラー」

子「シーノー」

セ「トーシンノー」

子「トウシュサイワイサイワイ」

セ「ココノダンナノシヨウバイゴトニハー」

子「イチバーンヨー」

セ「……ノシヨウバイゴトニハー」

子「イチバーンヨー」

セ「……家内安全ゴトニハー」

子「イチバーンヨー」

セ「……交通安全ゴトニハー」

子「イチバーンヨー」

セ「……シアワセゴトニハー」

子「イチバーンヨー」

セ「カアサン……ゴトニハー」

子「イチバーンヨー」

セ「オクサン料理ゴトニハー」

子「イチバーンヨー」

セ「……ゴトニハー」

子「イチバーンヨー」

セ「コドモタチシアワセゴトニハー」

子「イチバーンヨー」

セ「コドモ勉強ゴトニハー」

子「イチバーンヨー」

セ「ダンナタノシヤア」

子「モチヤケモチヤケア」

祝儀・餅等をもらって袋に入れる。

B家

(略)

セ「オクサマ裁縫ゴトニハー」

子「イチバーンヨー」

(略)

(昔のやりかたは)昔、こんな袋ないですよ。昔は風呂敷を利用してな。一年間のしあわせが巡って来るようになってな。

C・D・E家(略)。風あり。星が澄んでいる。

F家

(略)

セ「ココノダンナノダイリョウゴトニハー」

子「イチバーンヨー」

セ「マタモダイリョウゴトニハー」

子「イチバーンヨー」

セ「タイ一本釣リーダイリョウゴトニハー」

子「イチバーンヨー」

セ「……一本釣リーダイリョウゴトニハー」

子「イチバーンヨー」

セ「……海上安全ゴトニハー」

子「イチバーンヨー」

セ「家内安全ゴトニハー」

子「イチバーンヨー」

セ「交通安全ゴトニハー」

子「イチバーンヨー」

セ「シアワセゴトニハー」

子「イチバーンヨー」

セ「カアサンシアワセゴトニハー」

子「イチバーンヨー」

セ「コドモタチシアワセゴトニハー」

子「イチバーンヨー」

セ「カアサン料理ゴトニハー」

子「イチバーンヨー」

(略)

(餅二つ出すというのは決まっているのか)そんなことはないけど、だいたい二つ。(餅の名は)付いてない。ただの餅、正月やで。

G家

(略)

セ「豊年万作ゴトニハー」

子「イチバーンヨー」

(略)

もらった餅は子どもたちがあとでいわうのだ。昔は黍餅・粟餅があった。

H家(略)

こうやって廻わって行くことがナノリ。十時半頃にだいたい終わる。センドウはほとんど漁協の職員。火祭りは十二時頃。子どもはだいたい自分の組を廻わる。

I家(別の組に付いて行く。略)

」家（↓写真1）

セ「ハライヤー」……
子「ハライヤー」…… } 道中にて

セ「ヨイヨイヨイヨイ」

子「ヨイヨイヨイヨイ」

セ「アータラー」

子「シーノー」

セ「トーシーノー」

子「トウシュサイワイサイワイ」

セ「コレノダンナノ商売ゴトニハー」

子「イチバーンヨー」

セ「コレノオ客サンゴトニハー」

子「イチバーンヨー」

（略）

セ「……チョウメンゴトニハー」

子「イチバーンヨー」

セ「……ソロバンゴトニハー」

子「イチバーンヨー」

セ「オクサン料理ゴトニハー」

子「イチバーンヨー」

セ「オクサン裁縫ゴトニハー」

子「イチバーンヨー」

（略）

セ「オバサン茶ゴトハー」

子「イチバーンヨー」

セ「長生キスルヨニー」

子「イチバーンヨー」

（略）

以下、別に二組に付いて数軒ずつ廻わったが、大同小異。喫茶店にて休息後、漁協に行ってみると、行き忘れた家からの催促電話がしきりにある。待っている間に大正元年生まれの人、ほかの人に話を聞く。

○ 漁協にて

（この行事の名は）名告り行事とゆうとるんですけど。（漁協が行事を進めるのは）昔からここが主体でやっています。（センドウは）どうゆう人で、（その）家に合わして、職に合わして、たいがい知っとる人でないと、センドウできやせんもんでなあ。そのう、うちの……ええように名告らんとならんでなあ。（人選は）ええ、ぜんぶ漁協で。（センドウの語意は）さあ……。先に立つからか）んん、そうでもないけどなあ。（船頭とは）いや、関係ない。（赤い着物は）まあ、このへんではアカバンテンとゆうわな。（なぜ赤なのか）まあ、浄めっちゆわけやなあ。このへんではなあ、昔からの習慣や。鉢巻してやなあ。（もらったものは）あとで、子どもに皆分けてやるんですわ。昔は祝儀なんとゆうの、なかったんですけど。我々が子どもの時は、餅と、

お神酒をちょっとくれましたな。現在は持ち歩きませんけど一升壺持
ってそのお神酒を入れましてな。あとでセンドウさんなんかをそれを
いただいたりしたんです。子どもには餅と蜜柑。現在はこんな経済
状態ですから、子どもらは餅とか蜜柑に魅力がないもんで。昔は、特
に漁師の親方とかのうちは、一円玉を撒いたりしよった、時たま。現
在は祝儀をくれるように、いつのまにやら、そんな習慣になった。も
らったものは、センドウさんが中心で、子どもらに皆分け与えて。

名告り行事が終わって火祭りになる。注連切りも火祭りの中に入っ
ている。寺からもらってきた火を山の神へ持って行って。ここからい
ったん出て、桂昌寺へ行って、そこで火をもらってくるわけや。寺で
太刀を受けて。火は、火打ち石でうってな、焚いて。今はもうそうゆ
う道具がないでマッチでやとる。(桂昌寺でもらう理由は) そうや
な、わしらは、詳しいこと、わからんけどもな。山の神さん、な。出
口の山の神さんな。この土地の、いちばんはずれの、山の神さんちゅ
うわけだな。今は人口増えたもんで、町中にあるけどもさ。注連縄張
ってなあ。切る前に、張って。たいがい、除夜の鐘、前ぜんになあ。鳴る
か鳴らんかちゅう、境になあ。今あ、あんた、人口はよけい増えたけ
に、あれ、あの、町のなあ。村やったけになあ。前にはなあ、わしら
小さい時には村やった。その村のいちばん先の、村はずれなあ、そこ
が境になって、それへ注連縄張って、これから入ると、まあ節分とい
っしょで、鬼は入ってくつとあかんちゅうなもんで、注連縄張ってお
いて、その注連縄切るまで、絶対入れられん、よその人はな。除夜の

鐘を合図に、ウブシナさんへ……。その、人が来ても、絶対通しやし
ない。その注連縄切るまでは。

もとはなあ、あれからタイマツ点けて、そいでこの浜へ行って、浜
で鰹釣ってなあ、やりよったんだ。まあ鰹釣るとゆうな意味でな、火
祭りをあげよって、長い竿を持って来てなあ。もう三十人も五十人も
寄って出よって、あげよったもんだ。今は漁師もすけないやなあ、火
祭りする人はなあ。この頃はあまりやらんけどなあ、その火を各船へ
持って行って大漁を祈って、船玉様へ、その火をあげるわけや。船玉
さんに、その火を、タイマツをもらって来て、ぜんぶ、船へ入れよっ
た。アカミとゆうてな、魚の群れの大きいのを、このへんじゃアカミ
とゆんじゃ。そのアカミでよく獲れるようにてな。アカミでな、船に
入るようちゅて。昔の人は、そう言いよった。その火は、どこへす
えても、絶対火事は起こさん。今の若い衆は、それわからんや。そ
の火をこんど、神社へあげるわけや、波切神社へ。この頃は、その火
に対しては、あまり関心はないけどね、ほんとはその火は、トバ(鳥
羽?)から持って来るともある。オリンピックやないけどね、こ
う、つないでくのがほんとやけどなあ、この頃は、そんなのもうなく
なってしもうたな。あの、火をつなぐのがほんとの火祭りや。注連切
りは、海べたでも一人のセンドウがやるが、これは分家みたいなも
んで。むこうの、ここの、本家とゆうのか、昔の、あの、トリデとゆう
んですかなあ、そういうな場所と思えますけどなあ、そこでの注連切り
は、おおぜいかかりましてなあ、それが本式の注連切りになるわけで

す。

(山の神の火が大漁を招くのは) まあ、その火を入れると、アカミが、入るようちゆうなもんだと、ゆうことわざやないんかな。(漁師の祀る神は) わしらはもう、祭日とゆうんじゃないけど、その、神の事やっと、赤飯炊いて、祀りん行く。行事なもんで、海岸と、出口の山の神さんな、大漁神様なもんで、と、このオブシナさんとな、これは祀るはな。(波切神社と) オジングさんてな。ジングウさんてのはさ、この海岸ばたをゆうの。(祠は) なにも祀ってない。そのう、人によつてさ、むこうの海岸ばた祀る人と……、その人によつて違います。それはそのう、自分の、船繋ぐとことか、錨おろして船繋ぐ……。このう、イワイゴトに出るはな、オオツゴモリちゆてな。自分の船と、浜と、そいで出口の山の神様と、祀る。船へ行けば、大漁するように。海岸ばた拜む時にも、安全で、大漁するように。それはもう、遭難のないようにとか、海上安全とか。その、浜祭りと、船祭りと、出口の山の神様な。個人個人で、赤飯炊いてな、みな祀って。(船玉様は) 注連縄をさげてさ、船へな。そいでまあ、赤飯炊いて、祭りや……。自分の船になったらな、大工さんにな、船玉入れてもらいにな。大工さんは、隠して入れるもんなあ。人に見られんように。なにとなにを、うちでな、それ用意して、大工さん、ちゃんともう、……こしらえて、船の、いちばん濡れないとこにな、海水のかからんとこ、入れて。ただ品物だけ用意するだけ、船持ちの、船主は。(盛時の漁法は) わしらはもう鰹。鰹の竿釣りな。遠洋船。一と月ぐ

らいかかってな。このへんじゃ仙台も行ったな。四国の沖へも行ったな。

○ 午前0時五十分

名告りが終わって、餅を盆に載せて桂昌寺へ向かう準備。

○ 午前0時五十八分

提燈を先頭に二人が餅を盆に載せ、桂昌寺に向かう。一行はセンドウ等五人。

○ 桂昌寺にて

(玄関で) 「タノモー、タノモー」

(暫くして中から) 「オーオー」

戸を開けて提燈の明りを消して中に入る。午前一時ちょうど。上り座敷の、向かって左側に正座、住職が正装で出て対座。

代表のセンドウが「新年、明けましておめでとうございます」。一同、小声で「おめでとうございます」(以下、問答を住職は僧、センドウはセで示す)。

僧「新年早々、センドウ衆、なんの用事であられたんのは」

セ「我々センドウ衆は、波切町の代表として、当本山の波切丸を

いただきますに、参上つかまつった、次第でございます」

僧「センドウ衆、使者、シンキ(心機?) いまだいたらず。天下泰平・万民和楽のため、出なおしてござっしやい！」

一同、一度引きさがり、暫くして再び入る。

僧「一度二度の使者をもって授けるものではない。五穀成就・ゴ

ナングサイ（後難救済？）のため、出なおしてござっしやい！」

セ「そう言わずに、……さん、どうか、……をくださるよう（い）
ただくよう？）、どうかよろしく御配慮のほどよろしく……

……」

僧「新年の計は歳旦にあり、海上安穩・大漁祈願のため、出なおしてござっしやい！」

再び退出、暫くして入る。

僧「怒気晴れり、四民安全・四徳増長・寿命長秋・諸（所？）縁一生、いつさいの願い、みなことごとく成就することを……して、授けるものなり」

セ「どうも、ありがたくちょうだいいたします。どうか、この金銀をうけたまわるよう、お願いいたしまする」

セ「めでたく、宝蔵波切丸をいただき、この宝蔵をよき天下泰平のために、海上安全を祈り、大漁満足を誓わせていただきます。どうもありがとうございます」

ここで電燈が点けられて酒を酌み交わす。まず住職に酌、次に年少の一人が年長順につき、最後はまた住職に酌。

セ「どうも、ありがとうございました。……引き取らせていただきます」

一行、先頭に波切丸を捧げて退出、午前一時十四分。桂昌寺前近くの道路でタイムツ用の藁火が焚かれている。約十分ほど前からという。

藁火を持った若者に一人が付き添い「ハライヤー」「ハライヤー」
と交互に繰り返しながら、坂道を早足で登って行く。

（藁火を持つのは）三番まであるのや。そしてこんだ、港のほう、
鯉釣りの火入れる時には、一番持った人は三番なるのや。

○ 午前一時四十二分 山神社前到着（↓写真2）

脇の辻に古い注連飾りなどが家々から持参されていて、これが燃やされる。この時に女の人は初めて外へ出て来る。やがてセンドウ衆が「ヨヤーセジャー」の掛け声を繰り返しながら、注連縄を造る。最後に「ヨイヨイヨイ」と言って造り終える（↓写真3）。午前一時四十五分。それを道に張り渡し、シデを付ける。寺からもらって来た木の幡に「専祈」「苦民チシリ」「鎮静成就」と書いてある。やがてセンドウの一人が注連縄の村内側に立ち、小声で「ヤーマノーカーミカー」、大きな声で「ヤーマノーカーミカー」、さらに大きく「ヤーマノーカーミカー」と呼ぶ。すると数軒離れた物陰から山の神の声が「オ——」と聞こえる。するとセンドウが「コノ、オモ注連ヨリ、コノ大注連ヨリ、コーノオンミヨリ、ウーッテキハイリ来ルモノハ、切ッテ切ッテ、切りマクルーッ！」と叫んで、波切丸で注連縄を切り落とす。午前一時五十五分。先のごとく藁火を持った若者が浜に向かつて行く。

○ 午前二時七分 浜到着

浜の藁屑にその火が移されると、漁師たちが一本ずつ竹竿を火中に差し込み、火のついたのを振りあげる（↓写真4）。竹竿の先の燃えか

すを地面に打ちつけて落とし、さらに火をつける。一段落して火のついた竹竿を持って移動、午前二時十七分。ある人は港の船の舳先にその火をさし出して、船玉様に火をこめる。そしてそのまま波切神社に登って行く。午前二時二十五分。

○ 大王町観光協会・波切歳事保存会発行のパンフレット「波切のまつり抄」に、「名乗り言葉も古記録はつぎのように誌している」として、

あたらしき 新志伎 年の始めに 当浦仁幸々 重護慶祿
餅乃田禾羅 黄金之宝 大堂大瀬乃大勇名
荒瀬乃海ノ寄名吉 持々参津多 山祇ノ魂詞
此処ノ嘉々波一番潜女 三献ノ魚波清々喜代

とある。

二、安乗—ミタナ神事

* 阿児町安乗

* 昭和五十九年一月一日。晴。

安乗神社社務所にて諸役準備。

(袴を着た子どもは) あれがトウ。子どもたちがトウヤ(禰家)です。トウヤの成長したのがカヨウ(加用)。ちょっと制約ゆうのがあってね、一年間に不事のない家で、既婚者でなにかんわけ。それで、奥さんがおめでたでない人でなけゃいかんわけ。なかなか、二十人やっても三十人やっても、年頃はそうゆう年頃やと、絞ってゆく

と、だいたいおめでた、ちゅう家が多いやね。年齢は関係ないわけ。

結婚していれればいいわけ。正月二日にその年やるカヨウを探す。トウヤの中から候補者を探して、その返事を聞く。昔は、候補者十人くらいあって、もう取り合いゆうんかね、格式の古い人から、ゆうことでもやったんやけど、今はなかなか、後継者を探すのにね……。毎年正月十日にね、ここで注連切り神事をやるんだ、その者たち。チュウロウ(中老) ゆうのはねえ、カヨウ済んだ人。(大年寄は長老か) そうです。ね。その中で一老・二老ゆう代表者がある。祭事を行なうのに、宮司さんの補佐役です。ねえ。(加用はこの日) 山へ入ってな、木を伐って来て……。この、神社の山へ行って、モチの木を、朝、伐って来た。適当な木を見付けて伐ってくるわけ。(モチの木を使うのは) 持ち込むゆう、いわば幸せを持ち込むゆう意味やないかと思うね。その枝から、小さい箸、取るわけ。あれは八十一膳作らないかんわけ。

準備を終えてニワノハマのイヤモト(イヤモト)に向かう。祭場が整えられ、神饌が調えられる(↓写真5)。午後二時、一同揃って神事が始まる。片山義雄宮司が進めてゆく(↓写真6)。拍手・修祓に続いて祝詞奏上。その祝詞は次のごとくである。

……底筒之男命・中筒之男命・表筒之男命・天ノミヌメノ命・事代主命ノ御前ニ謹シミモイヤマヒ、カシコミ申サク、イソノカミイニシヘヨリノタメシノマニマニ、今日ノイク日ノタル日ニ、正月ノ一日ノミタナ祭ニ禰家ヲ初メ、加用頭・大年寄ニト、マタ役ビトタチ諸々ビ

トノ、マイ出デ来タリ、ヲロガミマツラクノ大神タチノ、高ク尊キ御魂ノ触ユニヨリ、カクシモヤスルオダイニアリウコトヲ喜ビ、カタミニ拝ミマツリテ、ミココロヲダイニキコシメシテ、コノ年ヲヨキ年ノウルハシキ年ト、行キ来ハウ船ノコトゴト、悪シキ風荒キ波ニアハセタマハズ、ウミニオダヤカニ、ツツガナクアリ通ハセシメタマヒ、暮ラシノワザトイソシミ励ム、……ワザニモサトニフカクイリニモナツレル、ツルイトモタユマズ、アゲモノヒク網モユルマズ、底ナキ海ノ幸々、サワサワニ得物得サシメタマヒ、オノモオノモ身スコヤカニ、家カド高ク、ヤチ栄ヘシメタマヘト、カシーコミーカシーコミーモ、タタヘゴトノオヘマツラクト申ス。

拍手。順次参拜。モチの木ノ蜜柑を人々が争つて取る。裸になった木を二人で持って海に投げ入れる。神饌を海に流し入れる。最後に宮司が神饌一皿分を海に投げ込む。そして一同が「イーヨーイツ、イーヨーイツ、ホー」というトキノコエを三唱して終わる。

三、安乗―翁祭り

* 阿児町安乗

* 昭和五十九年一月二日。晴

○ ニワノハマ 午後二時十八分〜三十八分

一行、安乗神社社務所で準備を整え、午後二時十二分出発。道中、潮水をふり撒きながら海岸に向かう。ニワノハマのイヤモト（イワモ

ト）に到着後、舞いの場を設定。御神饌としてアラエネ（米と刺身をあえたもの）を供え、海に向かってサンバツサンのうちまず一番叟が舞う（写真7）。

ハトウドー、タラリタラリアガリータラリー、ヒデンヤータラリタラリロー、アガリタラリタラリー。

コレモ千秋サムローヲ、鶴ト亀トノヨハヒニテ、サイハヒ心ニマカーセータラリー。（鼓・笛）

アイヤートーノー、アイヤートーノー。

鳴ルハ滝ノ水、日ハ照ルトモー、タエズトータラリーヤー、アイズトータラリー。（笛）

アゲマキガトードーヤ、イロマカリヤートード、アーシテヤイタレドモー、マヒノーレーギヤー、トードーヤー。

正面に一礼、次に左手（神社のほう）、次に南のほうにそれぞれ一礼。

チハヤフル、ヒコサノイハヒニテ、サイハヒ心ニマカーセータラリー、ヤー。アイヤートータ、アイヤートータ。（鼓）（舞）

二番叟が続いて面を着けて。

ハオーヨソ千年ノ鶴ハバンゼーラク、ウトータリ、マタバンザイノ池ノ亀ハ、コウニサンギョクヲイタダキタリ。天下泰平・村中安全・大漁満足・五穀成就ノ御祈祷ナリ。アリハラズサノ翁殿、アリハラズサノ翁殿。千秋万歳喜ビノ舞ナラバ、ヒトマヒモーヤ、バンザイラター、ア、バンザイラター。（鼓）

(舞)

アイヤートータ、アイヤートータ……。

(録音不調) ……喜ビアルヲ、コノ喜ビヲ、ホカヘハヤラジト

ー……オンモー。(笛)

三番叟は初め扇を持ち、次に黒式尉の面を着けて鈴を持つ。

ハキョーノオトノ太夫様ニゲンザンモースー。

メデタヤ、チョードマキツテソーロー。

コノモン、タチニテソーロー。

……サトノヤクメニ、マカリターツテソーロー。

サーレバニソーロー。……持ッテタマハレ、色ノ黒キ尉殿ー。

色ノ白キ太夫ノバンバント囃シタマヘー、ソコノ太夫殿ー。

ソノ太夫、囃サンコト、ナニモツテヤスウソーロー。

マヅハオナホリソーラヘー。

オン舞ヒソーラヘー。

コレヨリメデタキ鈴ヲマキラセソーロー。

アーラ、ヲコガマシヤナー、コナタコーソー。(鼓)

アイヤートータ、アイヤートータ……。

ハ千秋楽ニハアタミヲナビカヒ、万歳楽ニハ命ヲノーベ、相生ノ

松風ノ音、カラサキノゴヨータノシメー。

舞が終わってまた先頭は潮水を振り撒きながら戻る。

○ 秋葉神社 午後二時四十五分〜三時五分

ハトードー、タラリタラリアガリタラリー。チリーヤータラリタ

ラリ、ローアガリタラリー。(鼓・笛)

コレモ千秋サモローヲ、鶴ト亀トノヨハヒニテー、サイハヒ心

ニマカーセータリー。

アイヤーチョーハー、アイヤーチョーハー。(笛・鼓)

鳴ルハ滝ノ水、日ハ照ルトモー、アイズトータリヤー、アイ

ズトータリー。

アゲマキヤトードーヤ、イロマカリヤトードーヤー、サーシテ

ヤイタレドモー、マヒノーレイギヤー、トードーヤー。

チハヤフル、神ノヒコサノイハヒニテー、サイハヒ心ニマカセ

タリー。

ヤーイーホ、ハイヤーホーハ、ハイヤーホーハ……。(笛・

鼓)

ハオーヨソ千年ノ鶴ハバンゼーラークヲウトータリ、マタバンザ

イノ池ノ亀ハ甲ニ三極ヲイタダキタリ。天下泰平・村中安全・大

漁満足・五穀成就ノ御祈禱ナリ。在原ズサノ翁ドロー、在原ズ

サノ翁ドロー。(笛)

千秋万歳喜ビノ舞ナラバ、一舞モーヤバンザイラクー、ア、

バンザイラクー。(笛・鼓)

アイヤートータ、アイヤートータ……。

三番叟

ハオーサイアリヤ、喜ビアリヤ。ワガ喜ビヲホカニモヤラージ

トー、オーモー。(鼓・笛)

アイヤートータ、アイヤートータ……。

へアールトウ太夫様ニ見参モース。

メデタヤチヨード参ッテソーロー。

タガオンタチニテソーロー。

アトトオーセズイブンアトノ役目ニマカリタッテソーロー。

サーレバニソーロー。

メデタキ御祝儀ナレバ、モツテタマハレ色ノ黒キ尉殿ー(↓写真8)。

色ノ黒キ三番叟、囃シタマへ、アトノ太夫殿ー。

アトノ太夫囃サンコト、ナニモツテヤスウソーロー。

マヅハオナホリソーラへー。

オン舞ヒソーラへー。

コレヨリメデタキ鈴ヲマキラセソーロー。

アーラヲコガマシヤナー、コナタコーソー。(笛・鼓)

アイヤートータ、アイヤートータ……。

へ千秋楽ニハアタミヲナデー、万歳楽ニハ命ヲノベー、相生ノ松、

風ノ音、サワ、鈴ノ声ヲ楽シム。(鈴)

鈴のあと、さらに扇に変える。(秋葉神社で舞うのは) やっぱり、

村中安全の御祈禱をすんのや。(人形を入れる箱の名は) 別に名前は
ない。

○ 安乗神社 午後三時八分〜十八分

舞が終わって直会。

四、鶉方―獅子舞

* 阿児町鶉方 宇賀多神社

* 昭和五十九年一月三日(オカシラムカエ)

昭和六十年一月三日(獅子舞)

○ オカシラムカエ 午前0時〜一時(社務所)

電燈が消されて一同、榊の葉を口にくわえる。タイムツが焚かれる。獅子殿の扉の鍵が開かれる。ギーッという音。オカシラの鈴の鳴る音(↓写真9)。所定の位置に据えられる。「別嬪さんやなあ」などの声があがる。オカシラが二つ据えられて前に賽銭箱・三方が置かれる(↓写真10)。電燈がつけられ、口にふくんでいた榊の葉もとってよいことになる。三方に鏡餅が供えられる。白装束・羽織の若者から順に酒が廻わる。廻わり終わったのが二十分。最後は籠りの師匠との間で。オカシラの前の土間に荒蓆が敷かれ、その上に太鼓が据えられる。一人が太鼓の縁を打ちながら、

へタカマツノ音ハ、ザザンガザエー。

と謡い出すと、一同が立ちながら「山さし音頭」をうたう(↓写真11)。

三十三番までの歌詞がある。獅子舞保存会が昭和五十五年十二月に作

った冊子がある。たとえば、

4 お伊勢参りに扇をひろて ヤー扇めでたや末繁昌

は、

へハア、オイーセーマイイーリ ニー オーギーヲヒーローテ

ー ヤーオーオーギーメーデーターヤ スーエーハーハー
ョーオー スーエーハーハーハー ジョ アア スーエーハーハーハー
ーオ スーエーハーハーハー ジョー ヤーオーオーギーメーデー
ーヤ スーエーハーハーハー ジョーオオー スーエーハーハー
ジョ

のごとく繰り返しうたわれる。そして、

11 お杉お玉が百姓の子なら ヤー金の橋かきよ宮川へ

19 金谷峠へ上りて見れば ヤー大井川には水がない

31 裏の薬師で御印ごはんを受けて ヤー家のなんどへ納めおく

の終りごとに「ヒョー」というような声を三度発して祈る。この時は31までの歌詞で終わった。

もと、ここは宇賀多神社と権現神社てのがあって、そして合併して二つの獅子頭を、現在祀ってるわけ。以前は、宇賀多神社のほうが三十一日の、午前0時に、獅子頭を迎えたわけ。権現神社のほうは、今日、獅子頭を迎えて、あす、番いで舞うるんです。あの白いほうが、権現神社の獅子頭、雌です。赤いほうが宇賀多神社の雄獅子なってるわけです。昭和三十八年までは五日制でした。一日・三日・五日と、行事があったわけ。だんだんと、こう、青年層が欠けてきたのと、世の中の、こう、激しい時代の流れが、な、こう、あるでしょう。それでも、三日に短縮しようというところで、三十六年ろくから三日制にしたです。

この白いの着てるのは、ぜんぶこれ獅子舞の奉納者です。ここにこ

う並んでられる方は、神社の総代の方です。それでまあ、いちおう保存会てのがありまして、保存会と神社と、二本立てでやってることです。(若い人は)高校です。もう青年団てのが、なかなかむつかしい時代ですもんで、まあ、いちおう高校生にお願いして、でまあ、正月だけ、行事をお願いして(子どもは)クトウドリ。獅子頭がよそ道をせんように、子役が。

以前はな、昭和四十三年までは、このそばに、宮池てのがありましてな、そこへもう、六時から六時半頃にかけて、日の出前に、ぜんぶ、垢離掻きおったですわ。ざぶざぶとかけてな。池のかみのほうに、ちょっとこう住宅がよけいに出てきましてすな、そしてもう生活用水が流れ込むゆうことで、その垢離掻くことはやめまして、家で風呂で……。 (泊るのは)ぜんぶ男、女ごは絶対もう禁止。最近はやっと違いますけど。昭和三十三年までは、女ごは絶対立入り禁止だった。ちょっとでもそこらに女ごが来たら、すぐ水かけおった。

山さしゆうのは、これ、昔、この、宮籠りて、参籠連中とゆうわけですけども、そうゆう方は、家族に病人あるとか、自分が生活していくうえに祈願をかけるゆうね、そうゆうところから、宮籠りをして獅子舞したとゆうことになったわけですけども、獅子を無事に奉納して、年々積み立てる、昔から積み立て貯金ちゆうがあったわけですから、その積み立てたお金を持って、富士参りをしたとゆうことすわな。で、その道中唄なんです。(富士講は)最後にそうゆう講ができました。それで社前に浅間神社があります。(歌詞23の「ちんちかめく」

の意は) ちらちらするとゆうんでしょう。(16の「なます」は) 大根を刻んだの、それをよそおうとして。「祈る」とあるのは) 川に水がなく、あす渡る……。〔二節〕というのは) 途中、一服しようということ。(32・33をうたうのは) あすの朝です。外に舞台がしてある。ここで下山式をして、むこうで、最後の踊りをする、つまり、御来光を拝むわけです。これが済むと、うちへ、自由に帰れたとゆうことです。昔は、一週間は、境内からどこも出られなかった。十二月の三十日から、一月の五日過ぎるまでは、精進禊斎。六時から下山式をして、七時頃終わる。

(この食べ物) これ、ゆわれがありますのん……。これ、一年間、無病で……。特にこの、今日だけですわ。あす参って来た人たちに、自由にとって食べてもらうように。あそこに、こうゆうふうにしてお供えして。(この箸は) 自然の箸です。神社の境内の(なんの木とは決まっていない)。

(わらじは) 今日ほくの。もとは、雄獅子と出合いをした、その時に、境内から出てくのに、このぞうりをはいて出たとゆう、そうゆういわれがある。道中、こちらから何回も、早く来るように、早く来るようにとゆうことですから、使いを出したわけです。最終的には七回半通ったわけです。そいで今日の獅子舞も一回目を舞い終わって、二回目の舞いの途中に、ここへ七度半の通いが来て、準備してください。それから二回目を舞う。(舞の種類は) 三種類。普通の舞いと、^(オコシ)ツラボシちゆうのと、トビマイと、三つあります。最後には舞い別れ

とゆうのもありますけどな。普通の舞いとゆうのは三拍子で、太鼓と笛との三拍子で、もうすわけです。舞いで、キスもするし。

(保存会の前は) その前は青年団。各部落に支部がありまして、廻わり番こで。青年団の前は有志。(その呼び方は) 参籠者連中。(年齢は) 制限なし。今日は午後二時過ぎから始まります。舞い終わるのは、三時半から四時頃には終わります。

○ 獅子舞

祭典 午後二時〜三十五分

舞 午後二時四十分〜三時五十八分(写真12)。

五、立神―ヒッポ口神事

* 阿児町立神

* 昭和五十九年一月一日・四日(三日の分)

昭和六十年一月四日(三日の分)

○ 一日 晴。

祭典 午後三時半〜。宇氣比神社

鳥ノ舞 ゆっくりした太鼓、嫺々たる笛に会わせて一ノ当・二ノ当が拜殿で舞う。この間、宮司は宮中所定の座で神楽詞を奏す。村人は「踊ラッシャレヤ、踊ラッシャレ。サリトハミゴトデゴザール」「当年ハ大豊年デゴザール」「踊ラッシャレヤ、踊ラッシャレ」「シナヤカニ踊ラッシャレヤ、踊ラッシャレ」などと声をかける。〜三時五十五分。村人は三々五々引きあげる。

獅子迎エ(棚オロシ)

獅子舞役、宮司よりお祓いを受けて獅子頭をかぶる。四時半。

獅子舞 笛・太鼓に合わせて一番オコシ。二番オコシ、五時四分〜二十六分。終わって獅子が宮中で休んでいる間に、楽員に甘酒がふるまわれる。

三日がまあ、部落中の、豊年祭りとかね、その気持ちで獅子舞も……。今日は神社に、この奉納、だいたい練習ですわ、ゆうたらね。ぜんぜん、あれ、持ったことがない人がしてるもんでね。

三番オコシ、五時三十九分。以下、四・五番オコシと続き、途中、六・七番オコシを省略、八・九番オコシの後、オッコミとなる。獅子頭を納めて午後八時半頃終わるといふが、途中にて帰る。

○ 四日(兩年とも三日雨天のため今日に延期) 晴。(昭和五十九年のをまず記し、カッコして※印以下に昭和六十年のを補う)

正午前 当屋等は宇気比神社境内にやって来ると、まず拜殿にて賽銭をおひねりにして供え、拝礼。次に丸注連・獅子殿にて同様に拝礼。次に太鼓を打つ。一同揃って参道にて記念撮影。

(烏帽子をつけた役は) あれが烏ノ舞、二人。その次三番目、あれが杜氏役、まっ白な着物でここにおいて(甘酒造りを)やる人。あの黒い着物を着てる人が四番目で小屋番でゆうて、この人がまあ進行係みたいな役する人。それと神役とゆうて太鼓たたいたり、笛吹いたりする人を頼みに行く役の人が二人。その次の人が会計。その次が買物係。九人でとにかく構成されているの。あとの四人は獅子舞。全員で

十三人。子どもはコドリ。

十二時四十五分 烏ノ舞役が小屋場前の所定の位置に坐る。五番以下の当が座配の札を庭に並べる。下のほうから豆煎座と禰宜座とが、中座と山家座やまがとがそれぞれ向かい合わせ、片座と喜平座が宮中(参籠所)のほうを向き、平古座と向かう。南向座みなむせうと南座とが向かい合い、それがいちばん上座。(※十二時四十五分、九人役来る。拜殿・獅子殿・烏ノ舞役に拝礼、宮中の所定の座に着く)。

十二時五十八分 太鼓が鳴って九人役・神役が宮中の所定の座に着く。宮司、拜殿に参入、着座。一時、太鼓が鳴って宮司、本殿の扉、拜殿にて拝礼、拜殿からさがって烏ノ舞役に挨拶、宮中に着座、獅子頭に拝礼。宮中の諸員、烏ノ舞役に火鉢が運ばれる。太鼓が打たれて宮司、九人役・神役に挨拶。(※一時十分、当の人々によって)

宮司の前にハッパの火や幣用品・供え物が運ばれる。九人役二人、丸注連二本の間に洗米(マイルコメ)を盆に載せて供え、神前に造り物の小判を供え、それを丸注連に移し、さらに神前の賽銭箱になにか(洗米?)をかける(感じ)。終わって残る九人役二人とともにこよりを作り続ける。これは御幣をとめるためのもの。宮司の造ったヒトガタふうの御幣の一つが獅子殿前の注連、一つが拜殿にいちばん近い木の鳥居の注連にかけられる。(※一時四十分、九人役一人によって)別に篠竹に結ばれた御幣が二本、本殿に供えられる。一時三十八分、用具がさげられる。

一時四十分(※一時四十五分) 太鼓が打たれて宮中の一同、座を

立つ。座配(俗にシリクリアワセ)。各自、「ハゼモース」「オー」「…
 …座ニムカッテ敷キ藁ヲモターツシャイ」「カーシコマリマシター」
 のごとく呼応する。ところが座の並べかたが違っていてやりなおしと
 なる。宮司から祝儀が出される。正されて着座後、「ハゼモース」「オ
 ー」「ハッパノ火ヲモターツシャイ」「カーシコマリマシター」の呼
 応、ひととおり済むと第一献切菜(菜四切れを並べた椀を黒塗りの盆
 で運び、甘酒・神酒をつぐ)、第二献するめいか(するめ二枚に椀二
 つ)が配られる。次に鳥ノ舞役二人が下から上に順次、「コレヨリ御
 膳ノ仕度ヲイタシマス」と挨拶、続いて今度はナワダスキをかけて上
 から下に順次、「タダ今御膳ヲサシアゲマス」と挨拶する。この間、
 座の人々はするめを焼いて食べたりしている。鳥ノ舞役二人が重箱を
 捧げて立つと、宮司と九人役一人が下から各座へ挨拶をし、拜殿に向
 う(↓写真13)。重箱には海老等が入っていて小さな輪注連が載せてあ
 る。一ノ当のは二重ね、二ノ当のは一重ね、二人ともナワダスキをか
 けて口に白紙をくわえている。拜殿にて修祓、笹の葉で潮水を振りか
 ける。宮司昇殿、塩を口に含んだ後、神饌を供え、拝礼して祝詞奏
 上。終わって神饌がさげられる。宮司と九人役一人は上から各座に挨
 拶、着座。第三献空盃(シアゲの口を紙で包んだもの)が出され、す
 ぐに一礼。「ハゼモース」「オー」「ハッパノ火ヲヒカーツシャイ」
 「カーシコマリマシター」の呼応があつて、一同座を立つ。鮑の貝殻
 や藁・名札等がかたづけられ、宮司等は宮中に入る。

(※薬師堂にて ここには円空さんが書いたという磐若経が中にあ

るらしいな。今日、竹伐ってきて、準備始めたわけ。これまあいとお
 う、ハチクゆう竹を使うな。ハツチュクとゆう竹なんや。メダケてこ
 のへんでいいますけどね。ハチクちゆう竹が生えてるとこ、そんなに
 あらへんもんで、だいたい毎年、伐ってくることは決つとるでな。新
 竹を使うもんで、わりあいとあれ、柔かいな。ヒネ竹は使わんね。こ
 れはトリの若い衆。本来は独身の男やなけいかんかったけど、独身
 て今少ないなあ。独身の人があらんもんで、二十五やら四十二やら厄
 歳の人が入つて。今年は六十一も厄と違うんやけど、参加させてくれ
 ゆうことできるらしいわ。若い衆がおらんで、消防団にいちおう、元
 は頼む。あれはなあ、豊年竿ゆうのや。代々豊年とかなあ、もう一つ
 はなんやつたんかなあ。白い包の中、あれは宝物です。それは内緒で
 す。わしらも知らんのや。代々、もうずっと引き継いで。いつからあ
 るもんか、わしもわからん。ふだん預っているのはその地区の分団長
 が。若い衆頭がね。それであの宝物、わしらがまた持つて帰ってくる。
 終わつたら。神社へ行く道中、うたうんで、伊勢音頭ちゆうのな。正
 調伊勢音頭ちゆうのかな、これは。あんまり助平な歌うとうたらいか
 んちゆうんで。めでたい歌をうたいながら行くんでな(↓写真14)。

へオ伊勢マリーリーヨー(ハ、ヨイヨイ)オーギーヤーヒ
 ーローゲー(ハーリャヨイセー、コーリャセー)オーギメデタ
 ーヤ、コレコリハヤー、スエーハーンジョー(ソーリャマ
 ーターヤートコーセー、ヨイヤーナー)アリヤンリヤン、ア
 ーン、コレハイセー、コーリャートッコイトセ……

ハコトシャヨーガヨーデー、ヨイヨイ、ホニーホーガーサー
イター（アラーヨイイセーコーラセー）ミーターノコグサーモ、
ヨイトコーラー……

今、二時半やな。もうぼちぼち鳥ノ舞てゆうの神社で始まるわ。舞
う頃になるとわしら、そっからそこまで、神社の間行ったり来たりし
て、まだかいなまだかいなで。で始まると、わしらドドドッとして行っ
て、その踊るとる人、これをトントントンとつついて、あっちゃ向
けてくるわけや。それに触れると厄が落ちるとゆうんで。これがじょ
うずに踊るとまためでたいちゅうわけや。で、鳥ノ舞二人が選ばれる
ね。そうするとハゼの若い衆を二人選んで、その孫てのがコドリちゅ
うの。せやから、そこだけが三人出るん。昔は三代揃った人やないと
できなかったんとちゃうかな。今でゆうと、そうゆう孫のない人もお
るからね、親戚で借りてきたり隣で借りてきたりね。上がトリの若い
衆で、下はハゼの若い衆。下の人は独身の人が多いかなあ。高校生と
かなあ、そういう人が多いなあ。でそれは今年九人の座から選ばれた人
の息子ての、それ当てるんですわ。で、ちょうど九時頃になると、上
の若い衆がいかに酒を飲むかによって、できあがると、これ、豊年
竿、いちばんその、歳の若い順で、フリダシって決つとる。その人が
いちばん最初にこれを振り廻わすと、あとは誰が代って廻わしに行っ
てもええわけや。であといちばん最後にまたその人に返して。それな
に踊るかとうと、そのハゼの若い衆が藁をどどん焚くわけや。す
るとトリの若い衆がそれ見て、ドーンと走ってつてな、藁でパンパン

たたいて、それを消しに行かにならん。消えらんと世が悪いちゅう
わけや。若い衆がいかに元気があるかによって……。ちょっと坂にな
ってるでな。酔うとるもんで、走るのがえろうてな。で今度は、その
竿をむこうの九人衆の一人に渡すと。その頃は廻わして廻わしするも
んで、この、葉っぱも、まあなんもあらへん。で、あれ見て、これか
らお金括らんならん。その十二支のな。百二十円だけど、今年廻わら
してもらう人が、あれ、今から括らんやな。）

二時二十五分 各自、着座後、太鼓が打たれる。鳥ノ舞役二人は宮
司の所へ出向いて打ち合わせ。一ノ鳥居の所には黒い羽織姿の若い衆
が集まっている。当屋・九人役・神役等（九人役・太鼓・笛各一名は
宮中に残る）、丸注連（↓写真15）の脇に荒薦を敷いて坐わる。丸注連
納メ。宮司、拜殿を通り過ぎて丸注連の前に行き、修祓。宮司・九人
役・鳥ノ舞役の順に丸注連一本ずつに拍手・拜礼、この時にその芝
草を二つかみほど塚にあげる。次に杜氏役に合わせて以下の一同も拜
礼。終わって一同立ちあがり、杜氏役以下は丸注連を囲う形で塚の上
に立って丸注連の竹をつかむ（↓写真16）。太鼓・笛に合わせて九人役
の一人が米を左・右・中央と撒き続け、一同は「ヨイヨイ……、
ヨイヨイ……」と声を合わせたまま丸注連を抜き、それを担いで
宮中裏の谷底に放る。塚穴には造り物の小判・カチ栗などが入ってい
て芝草でおおわれる。一同、所定の座に戻る。二時四十分。

若い衆一同が黒紋付・白足袋・草履ばき姿で拜殿にて拜礼、そのま
ま引きさがって境内を出、階段前で百度参り。若い衆頭二人はオヒネ

リを賽銭箱に入れ、獅子頭に拝礼。当屋によつて宮司・九人役に酒が運ばれる。杜氏役はさかんに甘酒を作っている。見物人に甘酒がふるまわれる。庭に膝つきのための藁束が置かれ、宮中の荒薦が丸めてさげられ、小屋場の屋根に置かれる。

三時前 鳥ノ舞役が宮司・九人役に挨拶。宮司、獅子殿から八王子祭文を扇に受け出し、獅子頭に入れる。もう一つが出されて二ノ当に渡される。鳥ノ舞役は口に白紙を含んで拝殿に上がり、位置を占める。一ノ当が東側、二ノ当が西側。宮司、浄めの潮水を持って昇殿、神前の御幣をさげて鳥ノ舞役に渡し、浄める。宮中では九人役と太鼓・笛の各一名も拝殿に向かつて一列に並ぶ。三時、宮司、本殿前の真座に坐わつて祝詞奏上。二種あるようす。終わつて潮水をさげて宮中に戻り、着座。三時十分、鳥ノ舞(↓写真17)。太鼓(の縁を打つ音)・笛に合わせて宮司は神殿に向き、神楽詞を微声で唱え始める(↓写真18)。若い衆の警護役が二人ずつ紋付・袴姿に提燈を持ち、拝殿前と一・二の各鳥居前に立つ。舞の最中、村人が「踊ラッシャレヤ、踊ラッシャレヤ」「サーリトハミゴトデゴザール」「当年ハ大豊年デゴザール」などと繰り返し声をかけているところへ、百度参りを続けていた若い衆がなだれ込んで来て舞役を抱きあげ、邪魔をする。しかしすぐまたおろしてさつと引きあげると、舞は続く。舞・神楽詞が終わつて鳥ノ舞役はもとの座に戻る(↓写真19)。三時十八分。

獅子舞役・小踊役、宮中からさがつて小屋場裏にて身仕度。袴着一同、拝殿にて拝礼。宮司、獅子殿より獅子舞役・小踊役の衣裳を出

す。この時、太鼓・笛。三時半、太鼓・笛に合わせて宮司と九人役の一人によつて獅子迎エ。まず雄獅子が宮中の右に、次に雌獅子が左におろされる。神役一同、宮中にて修祓を受け、獅子舞役四人は仕度にかかり、付き添いと小踊役は宮中軒先に待機。

三時四十五分、獅子が宮中で立ちあがり、一番オコシ始まる(↓写真20・21)。二番オコシ終了後、一部の手に握り飯が出される。三番オコシ、四時四十一分〜五時一分。九分、村役人(自治会役員。トリバの監督)二人が紋付羽織袴姿で来る。そこへ火鉢・灰皿が運ばれ、九人役が挨拶に行く。この間、獅子舞役等も小屋場裏にて食事。鳥ノ舞役二人、宮中に三献目の留め盃を出すとの挨拶。宮司に見せていた「八王子祭文」に「謹請 東父天王・西母天王・牛頭天王・沙迦陀女、第一王子惣光天王、第二王子魔王天王、第三王子俱摩羅天王、第四王子得達神天王、第五王子良侍天王、第六王子侍神相天王、第七王子宅神相天王、第八王子蛇毒氣神天王、請二十八宿三十六禽、十二月云々」とある。五時二十五分、獅子舞役ふたび宮中に入る。この時、宮司よりお祓いを受け、祭文を受け取る。二十八分、宮中にて四番オコシ(スラ舞)、「ヨイヨイヨイ……」と三度、声がかかつてすぐ終わる。この声を合図に若い衆は「ワッショイ……」と豊年竿を担いで来てトリ場の村役人のうしろに立てる(↓写真22)。一部の人は宮司のお祓いを受けて拝殿にて拝礼。五番オコシは舞わないままにトリ場の前まで行き、そこで廻わつて鳥居の所で「ヨイヨイヨイ……」、そして庭で宮中に向かつて舞い、宮中に入る。これが獅子のヤクで、

四・五・九番がヤク。一五十一分。鳥ノ舞役と九人役二人が寺方の所へ挨拶。素襖着一同は青竹二本ずつを持って一列に宮中に向つて並び、「通りマシタカ」の伺い。六時八分、六番オコシ、この時「ハットトコソ」の掛け声。この間、トリの若い衆は着座するとハゼの若い衆（袴着）と「ハゼモース」「ハイ」「パッパノ火ヲ、ドンドト持ターッシャーイ」「カーシコマリマーシター」としきりに応酬。初

め個別であつたのが次第に声を揃えて要求するようになる。一二十五分。以後、七番オコシの頃には「食ワッッセー」「持ターッッセー」「飲マッッセー」「持ターッッセー」、そして杜氏役との間で「当年ノオ神酒ハ西井戸ガ多一過ギルデゴザール」「飲マッッセー」「持ターッッセー」「食ワッッセー」「ドンドント飲マッッセー」の応酬となり（↓写真23・24、はてしがない。やがては素襖着との間で「通りマシタカ」「通りマセン」「通りマセンナラ、食ワッッセー、飲マッッセー」となる↓写真25）。八番オコシ、ゆっくりした舞になつた感で七時二十五分一四十二分。この頃にはトリの若い衆の要求はハゼの若い衆の個人を指名して「〇〇殿ニ申ス」……のごとくなる。官司の所へ酒と海鼠が運ばれる。八時十二分、九番オコシ。調子が変わる。「通りマシタカ」の伺い。鳥居脇での「ヨイヨイヨイ……」。

「ヨイヨイヨイ」が済みますと、もう一回「ヨイヨイヨイ」のかけをやってそしてこれ（宮中）へおりて来るんです。その時に、これ十二銅、百二十円です。九人衆が中啓を……。お獅子さん来ますんです。ここで渡しますから。これあの、神社総代さんがもらってくる

です。それからあの、むこうからのを、みなお獅子さんがくわえて来るのを、受けるのはぜんぶ神社総代さんが、収入です。踊り込み、それが済んでから、あれたちが「二九、十八人揃イマシタカ」とゆうのは、あの素襖着た人たち、袴着た人九人ずつ、で十八人ですね。ぜんぶ小屋の前へ揃うて、それからあの豊年、竿笹おりてきて三回廻わして……。

八時二十五分、一段落して七度半がまた寺方の所へ伺いに行く。その間、獅子二頭は二ノ鳥居の参道下の所で待機。小踊役はすでに賽銭箱の所に腰をおろして休息。三十七分、素襖着がトリバの芝生の途中まで行くと「通りマシタ」の声がかかる。この声を聞いて裏方の人々は茶碗・食器類をかたづけ始める。寺方の所へ長さ五十センチほどの竹筒（御幣）が持って行かれ、それを立てて十二銅が結び付けられる。トリ場の幔幕も取り払われる。トリの若い衆は白禪・鉢巻をして身仕度。御幣の用意ができて獅子は一度宮中前に行き、戻ってまた鳥居脇の所からトリバに向かって舞う。子どもなどが十二銅の結ばれた御幣を持ってくると、獅子はそれをくわえて宮中の九人役の所まで運ぶ。五十分、御幣が捧げられるのが終つて獅子は一ノ鳥居脇の榎の下で威儀を正し、そのまま前進して宮中に竹の束を捧げ、また榎の所まで戻る。五十四分、二本の竹が獅子のうしろ遣いに渡され、それがやはり九人役に渡されて宮中に収まる。この時、村人の「当年ハ大豊年デゴザール」の声。豊年竿もトリバの前部に出される。竿の上に蜜柑がぶらさげてある。今、豊年竿を持っているのは葎男。これをフリダ

シという。北西と南東と、二つに分れている。こちら（二ノ鳥居に近いほう）が北西、むこうが南東。ここは西と北のほうが勢力が強いのでこちらが上になる。

九時 これは「二九、十八人揃イマシタカ」とゆうてる。で、「揃イマシタ」ゆうと、やってくる。これから笹踊りが始まる。これでいちおう、当屋の行事でなしに、今度はトリの若い衆が主導権をとって。で最後に、またこの人たちに渡すわけや。

鳥居と榊を結んだ間で両方の竿が一度、交互に行き来して場所を代わる。そしてまたハゼ場のまん中に行ってまた竿を立てる。そして倒す。ゆっくりと廻わすと村人は「踊ラッシャレヤ、踊ラッシャレヤ」「サリトハミゴトデゴザール」と声をかける。酒場の藁などが集められてさかんに燃やされる。

で、これも、三回廻わして交差するわけや。で、交差すると、それでもう、上から、あの火の中へ飛び込む（↓写真26）。だから交差するまで皆待っとる。こんどトントンで行く。それでまた三回。これからもう一時間くらい。こちら（ハゼ場）は燃やそうとする。こちら（トリ場）は消そうとする。とゆうのはね、顔を見られないとゆう、いたずらをするからね。だからあれ、菰かぶっている。笛の音は、もう哀調をおびてるでしょう。

豊年竿を持っていた二人は引き廻わすのをやめて参道とトリ場との間に立つ。提燈を持った二人が獅子の所へ豊年竿を持って行く。獅子はその竿を持って跳びはねながら宮中へ行く。これに「踊ラッシャ

レ、踊ラッシャレ」「当年ハ大豊年デゴザール」「サリトハミゴトデゴザール」と声がかかる。トリの若い衆はまだ火を消しにかかっている。トリの若い衆は「掛ケ物竿ヲ、掛ケ物竿ヲ」「掛ケ物竿ダゾヨ、掛ケ物竿ダゾヨ」と連呼する。

あれはね、青年が、宝物だとゆう、その宝物を早く返しなさいとゆう……。それわたしらに大事な宝物だから、早く返してください、て。

掛け物竿を九人役二人が持って来てハゼ場に立てる。そして軾を置いて廻わし合う。するとまた「踊ラッシャレヤ 踊ラッシャレー」「サリトハミゴトデゴザール」「当年ハ大豊年デゴザール」としきりに声がかかる。その竿が交差して置かれる。すると「若い衆行カンカ」と村人にうながされてトリ場の若い衆はまた火を消しに行く。九時二十五分、宮司から鳥ノ舞役二人に含み紙が渡される。

あれはね、獅子を招くねえ、ふだんはもう一年中、獅子が口にくわえている含み紙とゆう。それを持って、獅子よもう早く帰りなさいとゆうのを、今から鳥ノ舞役を勤めた一ノ当・二ノ当が招くわけ。

笛・太鼓の音がゆっくりとし、鳥ノ舞役が宮中の廂口から獅子を招き続ける（↓写真27）。宮司が提燈をつけて獅子の所へ行く。獅子はようやく舞い出し、おもむろに宮中に向って前進（↓写真28）。やがて笛・太鼓の調子につれて舞いは激しくなる。途中から雄獅子が勢いよく村方の所へ行って一舞い（↓写真29）、すぐ宮中に戻って獅子頭をぬぐ。するとトリの若い衆はそのまま境内を出て行く。その時、獅子はまた宮中から一度出て鳥居の所まで行き、戻る。さらに火は燃やし続

けられる。村人は「ハゼ申ース、火ノ用ー心ヲヨメサレー」と言い、「カーシコマリマシター」の声を聞きとどけながら帰る。太鼓の点打が続く。見物人も帰る。宮中では宮司と九人役が獅子頭を納める。終了、午後九時四十五分。消防団・婦人が手伝って境内の掃除。宮中で簡単な晩餐がある。

○ 立石祭り

* 昭和五十九年一月四日に聞いた話

ま、あれ、海の神様になってますわな。漁協の主催で、毎年四日の日にね。まあ、立石祭りちゆのは、正月の四日ちゆうことはずっと昔から伝わってきてますでな、もうぜんぜん変更なしで。昔はね、神事が一日と、それから二日・三日と休んで、四日・五日とあったんですけどな、四日が、あの縁日でことで、立石のほうやっとなるんですが、神事が一日と三日になっても、ずうっと立石祭りは四日とゆうことで。それはねえ、自治会でやる行事なんですけどなあ、昔はその、若い衆が祀ったわけなんです。あの大きな注連縄もみな若い衆が作って。今もう青年会が、いろいろな事情で、就職とかなんとかで、あまりいなかにおらんちゆうことで、青年会組織ちゆものがないんですよ。それでもう自治会は、漁協が浜祭りをやるんだから、それに合わせて無理してくれちゆうことで、それで漁協でもう祭りのほうも……。あそこに、真珠の漁業権の獲得記念碑があるんですが。これがその昔、大正十二年に御木本幸吉氏と漁業権の問題で闘争があったわけなんですけど。で半年がかりでようやく免許を立神の漁業会でもらっ

たわけなんですけど、そのまあ碑が建つとるんですわ。そこで浜祭りて、まあ、年の大漁を祈願して海上安全を、とゆうことで、まあやっとなるんですが、それがちょうど漁協が、立石神社もいっしょに、終戦後からですわ、祭典をやるようになりましたもんですから、まあ同時にやっとなるんですけども。なんとゆうても、立石神社（↓写真30）のほうは縁結びの神とかねえ、いろいろと、風邪ひくと体へ湿疹ができる、カザボちゆうんですけどな、その神さんだとかゆうて、あの立石さん、注連縄で作った、藁で作った、あのう、お守りみたいな作ってな、それでこう搔くと、なおるんだちゆうことで、言い伝えがありましてすな、カザボの神さんだとかゆうてやっとなるんですがな。あれは置いてあるんで、詣りに行った人が一つずつ持って、でまあうちへ持ってって、それで、神棚へあげるだけのことや。昔は近郊から皆詣りに来よったんですがな、今はもうほとんど、そう参詣者も、少なくなつて、数えるぐらいしかないとゆうんですけど。十時からもう、あのう、祭壇設けて、禰宜さんに来てもらうて、お祓いしていただいて、祝詞あげていただいて、お祈りするわけですけどなあ。役の人らが、玉串あげて、詣って、それだけのことや。特にどうとゆうことないですけど、こんど浜祭りのほうは、福引きもやってすなあ、人寄せに、やっとなるんですけど。（立石の言い伝えは）我々が知ってる範囲では、ただ大漁祈願・海上安全くらいのもの。あれ、潮引くとね、ちょっと二見の岩と似たね、岩が小さいのとありましてすな、あれは、いつの時代にああゆうもの立てられたか知りませんですけどな。

(岩の下から真水が湧くというのは) そうゆう伝えもあるんですが、わしら確認したわけじゃないんですけど。(龍宮さんの話は) それもあまり、聞いたことないですなあ。(注連縄は) みな、漁協の役員がやっとなるんです。いつも、十二月二十六、七日頃に。おんなし日にはずして、またそれと寸法合わせてすなあ、おんなしようなのを作るわけなんです。(浅間祭りは) いや浅間は浅間でまた別にあるんや。それは夏。立石の前に立ててある、あれを替えるんや。盆頃やね。あれ、旧の六月や。それはまた村で順に廻わって。

* 昭和六十年一月四日の見聞

立石祭り 祭典午前十時〜二十五分 玉串奉奠は漁協組合長・自治会長・九人役・神社・農協・森林組合・消防団・運営委員・組長・老友会・一般代表の順。参拝して帰りにカザボをもらい受ける。

浜祭り 祭典午前十時三十五分〜十一時三分 真珠漁業権獲得記念碑の前にて 玉串奉奠は漁協組合長・自治会長・九人役・組長等の順。

立石祭りにお詣りに来たお婆さん(明治三十六年、立神生まれ)に
へ立神立石コグラ石、こぐって見れば仏石、てゆうての、わしら子どもん頃はの、うとうとるんしたじゃ。なんてゆう意味じゃ知らんじせ。なあ、子どもの頃、よう嫁入りの酒の場合やったくもの、歌の切れた時には、こんなことゆうてうとうとる人もある。昔はよう歌の切れ目など、へ立神は、ひょんなどこ、てゆうての、酒のその切れ目のあいに、うたう人もありおった。(カザボは) とにかくカザボが

できるとの、ここへまっ来ての、この注連縄かけてある、その注連縄をもっての、カザボをの、こうこうこう、するとの、なおるて、ゆうて、わしら聞いとる。

○ 平古周宮司(明治四十五年生まれ)の話

* 昭和五十九年一月三日

(宮司となったのは) 私の場合は昭和四十年ですけど、辞令は。その以前から禰宜として、前の宮司さん(前田氏)がおりました時から。(代々か) いやいや、前、先祖はやっておったんですが。で私は、ぜんぜんそうゆう素養もなんにもないしなあ、百姓で。前宮司さんが弱うなってきたから、お前んとここうだから、なんとかやってくれんかとゆうことで。他の神社祭典ではよその禰宜さん頼んできてもらえますけども、この神事になりますと、よその禰宜さんでは座とゆもんがないでしょう。この行事がなあ、あの板の上に坐るのも、あれ特権なんですよ。それと庭へ藁敷いてやる座配の行事でもんも、よその禰宜さんではできんもんでな。どうしても村で、お前んとこやってたんでとゆうで、しょうがないってんで、講習行ってこうかとゆうで行ったわけで。県の神社庁で。

(宇氣比神社となったのは) いや、それも記録、ないんです。ただ、明治四十一年に合社してからははっきりしてますけど。(日天八王子というのは) ここはなあ、もと、五男三女神ですわ、御神体がなあ、その五男三女神とあの八王子とは違うんじゃないかと思えます。(社殿の呼びかたは) ふつう本殿です。その前に、あれは拝殿ですわ

な。そして獅子殿でゆうてお獅子の入ってる、あれは参籠殿ですわ、籠り殿。(境内の階段入口の鳥居の名は)別に、一ノ鳥居、二ノ鳥居ゆうてますだけで。(拝殿前の砂利敷きの所は)いや、いわれもなにもございませぬ。あそこからは脱靴とゆうことで。

(この行事の名称は)土地は神事と。(ヒッポロというのは)笛のなになが、ヒッポロと聞こえるところがあるんですわ。それから出てきたんでないかと思ひます。総括してジンジと、名前のゆわれたの、よそさんから付けてくれたんじゃないかと……。いつからか、子どもん時からヒッポロくと。ヒッポロ見に行こうやと。ヒッポロとゆうことばは、聞いてましたけどなあ。ヒッポロ神事というのはなあ……。

(役職は)九人役は四人。九人あったんだと思うんですけども。以前は、そうゆう偉いさんが、この神社の、こう監督とゆうかなんかこう、やってたんでないかと思ひますけども。現在ではもう四人だけです。神社だけでなく、お寺も、村のすべての行事も、まあいわば村の元老ですわ、九人役とゆうその四人の人は。神祭に限っては、九人役がいちばんの親方です、私も責任者ではありませんけれども。神事に限って、九人役が。(九人が四名となった)さ、その事情は……。ま、ずっと以前から四名ですもんではなあ。戦前の、神職のできる以前の制度、以前の、一年当屋とかなんとか、そうゆうふうなのあったらしいです。そうゆう時にまあ、今年の当屋は南座から出ると、すると来年は南向座とゆう、その一年神主とゆうような時代があった、その当時、九人役とゆうようななにながやとったのではないかと思ひられるだ

けで、ぜんぜんその記録もありませんし。(今の九人役の名は)浦谷・川添・前田・大西と四人の人ですけどな。これは氏子、村中で選出。ほんとうは氏子総会で選出するんですが、村の行事もぜんぶやりましますんで、村の総会で選出せられた人が、神社総代も兼ねると。ほんとうは神社総代なんですけども、神事に限って九人役とゆう名前を。神事と村の行事に限って九人役とゆう名前を、呼んでおります。(別称は)ええ、もう九人衆のほうが多いでしょう。(任期は)四年です。もう二十年、くらい前からです。昭和三十七、八年、その以前かもしれませぬなあ。六年とゆう時も、ちょっとあったですわ。十年とゆうのは、我々は聞きませんが……。八年は、我々は知ってますけどなあ。八年はこれはえらいとゆうので四年に変わる、途中で六年(のとが)、一年か二年あったですわ。

(当屋は)九座から一人ずつです。南座・南向座・平古座・喜平座・片座・山家座・仲座・禰宜座・豆煎座と。毎年、年長からだんだんに一人ずつ出ていって、ぜんぶ済んでしまふとまたもとに戻って、また年長から。だから、よそさんの当屋と違って、ここは二回も三回もやる人が。長生きしておれば、二回も三回も、当屋をやる人がおります。(九座と九人役との関係は)それはないんです。(座とは)これはね、ひとつ、なにか系統を思わせるんやないかと思ひます。(家の)ええ。これはあのう、藤原南座・藤原南向座とね、金・安部・渡会とか……。 (それと今の姓は)ぜんぜん関係ないんですけど。その平古というのと、山家というのがありますけども。他の人はもう、現在の姓

とは関係はございません。そして村の組分けしてあるのも、九つ分けてあるんです。座との関係なしにな。(当屋の順位の名は)そのうちの年長が一ノ当。(最後は)九ノ当です。(選出は)正月の十二日に決定するんです。(その名称は)それはなあ、どうゆう名前前でゆうとるのかなあ。(どこで)ここうちの年番、その四人のうちの年番とゆうの、年々交替で、一年ずつやります。それで当番の人がそこへ、ヤドへ寄って、あのを、座帳とゆうのがあるわけです、その座帳によって、このうちは済んだから、来年はこのうちだ、とゆうことをずっと、四人で選考して、そして、持っていくわけです。(一ノ当・二ノ当が鳥ノ舞役)そうです。鳥ノ舞とゆうのは、酉ノ時詣りとゆうの、あそこに丸注連巻キとゆうの、ああゆうなにかから出てきたのでないかと思うんですけどな。鶏鳴時に詣る、酉ノ時に詣る、それで酉ノ詣りと、あの、舞を、鳥ノ舞と、ゆうたもんでないすかなあ。(次は)年齢順に、三番目の人が杜氏で、これまあ、あの、酒造りですわなあ。(これだけ白装束なのは)あれもう、酒造りですもんですからなあ、略して、釋がけで。(甘酒は昔は)濁酒でしたしょうな。(造るのは)二、三日前に。今日いただくのは、二、三日前に。一回に出すやつは一回に造れとゆうふうに。今年なんか、伊勢神宮から甘酒造る先生頼んで、やってもろうとるらしいです。ヤドモトで、酒樽に仕込んで、それをまあ桶でこちらへ運んで来て、あつたためて。四番目の人が小屋番と。まあ羽織着て。五番が会計(係)、それから買物係、それから神役(係)となると、それから瓶子(係)・帳簿(係)と、ゆう九名が。

(素襖着という接待係は)その、九名の中から、五・六・七・八・九番とな、五名が。一ノ当・二ノ当・杜氏・小屋番と、その四人はぬいて、五人の人が、この宮中のほうの給仕に、素襖を着て、おるわけです。その、会計も買物係も、神役頼み、瓶子も、あそこに給仕係・接待係を、やるわけです。間には、そうゆうその、いろん材料を集める役目でおりますけどね。素襖着た人は、あのを、竹をひいて「通りマセンカ」とゆうてくるだけしか、あの参道よか上はあがれんと、なあ。我々でも、あれはあがったらいけないと。ただその、素襖を着た人が行くのは、竹二本を持って行く時の、あれの時に行くだけで。(裵着は)当屋の若い衆が、その九名からまた一名ずつ、若い衆を、こんどトリ場のほうの接待役に。(小踊は鳥ノ舞役のうちの子か)はい。ない時にはもう、連中から。適当な子どもがない時には、その当屋連中から、連れてきますけど、それもなにもない時には、当屋の外のところでも頼んできます。氏子の中で。自分とこの孫であつても、よそへくれた子のは出さないうです。座配の行事なんかできませんから、坐るところがないから。ただ、もう村内の、子どもたちを頼んで。(必ず男の子か)はい。(年齢は)いや、それは制限はありません。まあ、子どもとゆうことで。二年生か三年生くらいです。あまり小さいとすなあ、かわいそうですわ、遅くなりますしなあ。(天狗の面を著けるのは)天狗とゆうのは天宇受売とかなんとかなあ、そうゆうことも言いますけども……。 (面の大小の別は)あの長いほうが雌頭、鼻の団子鼻の平ったいほうが、あれは雄頭と、牡・牝の。そい

で獅子も雄頭・雌頭とゆうふうに呼んでおります。

神役とゆうのは、獅子舞と楽師を。獅子舞が四人、楽師が三人ですわな。太鼓と笛と。あれは当屋から頼みに行くんです。代々もう、自分の弟子のようななにを、教えてきて。(師匠は)今は、あの、小林とゆうのがやってますわな。前は、この獅子舞役も、あの、プロがやっていたんですけどな、まずそうゆう人が、頼んでももうないもんですから、当屋でやるとゆうことに。当屋九名ですけども、座によって多い少ないがございますので、多い座から四人ずつ、獅子舞分の、廻わして。(神役の年齢は)決められた年齢はないですけどもな、年寄は時間が長いし、えらいでしょう。だからどうしても若い人に。

(寺方は)二人。一人はあの少林寺とゆう宮寺と、ゆうことで。御神事始める前には、あれ、瓶子ありますわな、瓶子徳利と。あれを持って、そして甘酒を、ま、女に持たしてすなあ、使いにお寺に、その瓶子を納めな、神事ができないと。(宗派は)臨済宗、妙心寺派の。これは(本福寺も)両方とも、立神は。あそこへお神酒を納めな、神事ができないと。

(若い衆は)ほんとうの若衆でしたんですわ。ですが、その、若い人みんな工場なんかへ出て行きました。一時やまったのが、これではいけないと、ゆうので今度は消防団が、これを持続しようじゃないかと、ここではもう、こうした祭りもないから、なくしたらおしいから、我々がやろうじゃないかとゆうので、消防団が現在、主になって若い衆を、やってくれておるわけです。

(準備は)この十一月に入って初めて、一つの行事やりますけども(十一月一日を霜月朔日といって神事の始まりを告げる行事を齋行する——昭和六十年の書信による)。しかし、その間は行事もなにもないんです。

コメヨセとゆうのが第一番ですわな。これ、十二月の十一日に。それでお酒も造りますし、経費に当てるわけです。一升です。一升五合のこともあります。今は白米です。以前は玄米でした。そしてあの、鳥ノ舞役が餅搗く臼ありますな、庭へ蓆を敷いて、ツキゾメてことやって、あの、素褌着てな、そうゆう儀式的なことやってやりましたけど、今はもうそうゆうことやりません、ぜんぶ白米で。一ノ当がヤドモトになるわけです。貝を吹いて、村中、いちいち知らしてくるわけです。(氏子の戸数は)三三四戸。四〇〇戸からありますけどな、よそから来た人もありますんで。(昔はこの日に酒甕・注連縄も用意したか)はい。

(次は)二十四日に皆寄って、神社の清掃から。ヤドモトへ寄って、それからここへ来て、神社の清掃をして。

そして、二十五日に、滝ノ浜、大王町の船越へ。あそこに滝が落ちるがですわ。そこに禊齋に行ってもらいます。当番がぜんぶ、鳥ノ舞も素褌着も小踊も。滝と海との間を七回半、七度半往復して。禊ぎをして。(帰りに潮は)最近は汲んで来るらしいですなあ。けど、あの、藻草を持って来て、そして家へ。各人がお宮へ出仕する時に、それをムクシオ(無垢塩)とゆうんですが、藻をかけて禊齋をして

来るんです。クイノキ（食い除き）といって、以前はたくさんありましてなあ。鳥ノ舞役の場合は、ぜんぜん自分らで煮炊きして、いっしょにうちへ入らずになあ、別の、自分とこのうちだけど、薦を敷いて、おして自分で煮炊きして。獅子舞役もそうゆうことだな、やっておりましたけども、現在はもう、その、クイノキとしてはなにはございませんけどな。しかしあの、仮に私とこなら私とこに、まあ出仕者になるのに、どこか忌みのかかった、家内でも子どもでも、ありますと、その分だけうちのを食わず、別に炊いて食うと、そうゆうのはまだあります。そうゆうのをクイノキと、ゆうおけです。まあ、忌みをきらいますのでなあ、そういことをやっております。で、早朝から行って、それからまた神社へ来て清掃やって、午前中は、外へずうっと巻いてありますわな、縄（注連縄）、それを午前中やって、午後からは丸注連巻キとゆうのを、午後一後頃からやって。前は十二月の三日でしたけどな。十一日に寄った時に、ぜんぶ準備しておいて、その竹を。これは村の、わりとみな、竹出てくるもんで……。あんまり早くなにしても、若竹ですのてな、しおれるでしょう。だからまあ二十四日頃、準備しますけどなあ。始める前に、以前はヤドモトで本膳で、ごちそうになったわけです。しかし今は、ここ（社務所）で、私と、九人役の年番の人とか、鳥ノ舞役二人と、小踊と、六人が、上役として、茶菓だけをいただくんです。私らがごちそうをいただいでるうちに、その丸注連塚といましてなあ、当番があそこを巻けと。そいで私らの給仕人は神役と、お茶の接待をやってくれる。（竹・松と下の

は）あれ、芝ですなあ。あの中に空洞ができる、それへこんど、納め物をするんです、あの中に。以前はあれへ、食料をまず入れておったらしいんですわ。食料とゆうことは、結局、神役と獅子舞役のな、そういうったの、櫃にかち栗、それから蜜柑（柑子）な、串柿、そういうのを素焼き（の皿）に入れて納めてあるんです。とゆうのは、もう獅子が入ると、もう何時間でも、おしっこ（をしに）、今は出ますけどなあ、以前はぜんぜん、出なかったわけです。そうゆうものを食わして、小便止めに、食わしておいたと、そうゆうために納めるもんです。これを納める材料はぜんぶ当屋から持ってきてきますけれども、納めるのはこちらが、九人衆がその材料集めて、そしてそこに梱包してですな、それ納めて、それにこの幣を著けて。この幣は、ふつうの幣だと右手前に折るんですけどなあ、四垂れで、あれとこの獅子の頭に著いているあれは、幣は、左手前に五垂れに。（前に立てた小さな御幣は）あれを前に立てよとゆうことですのでな。あれも五垂れにして左手前とゆうことです。それから丸注連巻キのお神楽でが、神楽詞の奏上をするわけです。また祝詞と違うわけです。アーとかイーとかな、まあ、神楽詞とゆうので。

（西時詣りは）今は、五時にきっかり、みな参りますけどな。二十六日の朝から。二十六・二十七・二十八日は一ノ当が、その次三日間は二ノ当が詣る。一日・二日・三日と三日間は両方が出合って、お詣りする。詣るとゆうよりも、一つの警護、宝物を入れてある、それの番がてら、とゆうことになります。（丸注連を造るのはこの神事

だけか) そうです。(秘密なのか) いえ、そうゆうなにはぜんぜん。秘密なものありません。しかしお獅子さんだけはもう、ぜんぜん他へ、門外不出で、正月の、舞う時だけしか、出しませんよ。

(祭場の準備は大晦日) そうです、朝から。幔幕からなから、もう神社でもうかまわずに。だいたい昼までに終わりますけどね。

(祭りが一・四・五日だったのが一・三日になったのは) それはもう戦時中ですわ。若い衆がみな工場のほうへなんか、動員せられて、やむをえず、改正したような状態で。以前、その改正になった当時、このササマワシも、若い衆ぜんぜんおらんかったですわ。それでも、鳥居へ、豊年竿をしばって、それでなんとか踊り込むような、そうゆう時代がありましたもんで。以前はぜんぶ、一日・四日・五日とゆうことでしたんです。(新暦の) そうです。以前は、この、旧暦で、この神祭じんさいはやってました。ほんとうは、旧の、一月元日は、神事とんじなんですけどもね。合併してしまっって、一日は元旦祭をやらなけゃならん、そうゆうことで。

(小屋破りは) それはなあ、あの、若い衆が、まああの、「通りマシタカ」ゆうて最後にトメハギが、済みますわなあ。するとそのむこうから、あのこちらから、「通り」に行っって「通りマシタ」、トメハギをいただいたと、ゆうななが済むと、こんどあの小屋ももうぜんぶ道具もみなほかへやってしもうてな、そいであれ(小屋)を破るんですわ。破ってその、火で燃やすんです。もうあとかたづけの、準備ですわなあ。前はあの、四日に、その、竿を廻わしてな、若い衆が。そして五

日にまあ、その、小屋を破ったんですけど、今はもういっぺんににしてしまったんでもう、豊年竿、その若い衆の笹踊りと、小屋(破り)をもういっぺんに、やってしもうもんでな。

(丸注連の納め物を放りに行くのは) それはその、神事の終わった翌朝ですわ。早う起きて、その、暗がりですな。鶏鳴時ですわ、これを、宝物を取り出してですな。誰にも人に見られたらいけないと。立石の先へ、海へ放りに行くんです。それ放るのも、前へ放らずにうしろむいて、放って。九人役の、その、年番が。立石のまたもうちよつと先へ、立石神社を通り越して、そしてむこうになあ、オカシラとゆう地名のとこあるんですわ。そこになあ、前はそのう、今でゆう監獄ですか、囚人を収めておったんだと。それに、内緒に差し入れに行く形じゃと、言いますのやけど、むつかしい。そのつながりはな、わからないんですわ。そしてそのなア、海に放るんですけどなア、ぜんぜん、遠いとこ、行きませんよ。それがなア、まあ翌朝行ったら、ぜんぜんありませんのオ。あれだけが、不思議ですんやな。

(立石神社は) もうここに合社して。以前はここと兼務してましたけど。明治四十一年に合社して。(立石の注連縄を新しくするのは) もうそれは、二十五んち頃でしたか、新しいのにしています。で、二見さんのような岩ですけど、石です。津波かなにかで出てあったんだと言いますけどなア。二つあります。あの、二見の、あれと同じかっくらですわなア。それだけのことですわ。(大岩の下から真水が湧く) ええ、そうゆうなには……ええ、聞きますなア。(立石祭りは) 以前

は若い衆が、青年会で、その祭り管理しておりましたけど。正月はもう自分ら遊びたいでなア、そしてやめちゃうのもてゆうので、漁協さんが主体で、この。昔は、たくさん詣りましたなあ。すると、そうゆう時には収入もよかったですし、若い衆の。だんだん収入もなくなってきたし、こんなもん勘定にあわなくなってきたし、自分らも正月遊びたいからなあ、やりてがなくなってきたわけです。で、それを済まして、この神事のほうへまた、参画しよったですけども。

(薬師堂の前で立神首頭などは) ええ。まあ、俗ななにを、歌ったりなあ、特有のまあ、節ですけどなあ。今の人はもう、やらんよりも、そうゆう節を知らないです。五十代ぐらいの人は、ほとんど知らんでしょう。私はまあへたですけどなあ、ハハー トウザイメサーレーイ、トウザイメサーレーイ、トウザイメサーレーイ、とゆう節です。これを俗な、まあ男女関係、女、誰それさんと誰とがいい仲だとゆうやつを、あそこで発表するんです。

(立石の所の笠松は) もう今、枯れてしまつて。(いつまであった) 私ら覚えてますんでなあ。(あそこを西ノ神島・東ノ神島という) はい。字名がな。さあ、地名の語源は知りません。(立石の所の池は) ええ、遊び池、まあ水溜めですわなア。潮溜めてゆうんですか。(それに注ぐ寺川を汚してはいけない) そうゆうなには、あったかと思いません。(大日という丘は) ええ、大日の丘はあります。行者さんとなア、大日さんと、祀るところです。立石さんとは関係ないんです。

けど、その浅間さんの、人が、浅間の行事済まして、その大日へ、お詣りしてくるんです。

(五月二十八日の) それはあの、浅間祭りですな。これ、やっぱり、村でも年番で、ずうっと、四人ですか。(当屋とは) いやそれとまた別に、ぜんぜん関係ありません。(浅間さんを祀っているのは) いや、別にないんですわ、その立石の、石へ向かって。竹を立ててやるのはなア、しますけど、立石さんへ、御飯と、藁しべのこれくらいに切ったやつをなア、南無浅間大菩薩ゆうてまあ、お供えするんですけどなあ。これはあの、富士詣りした人がなあ、あそこでまあ行をやって来た人が先達で。(講で) そうゆうことなんです。村中、ま、講員ですなあ、あれで。順番にずうっと廻わってきますんで。

(立石の奥の) タツボはな、どうゆう名前か知りませんがなあ、あそこへ、女の人が、下のわづらいをやつてなあ、そいでまあ、定に入つたと、自分で、洗うてこう、そこで。自分はそこで、あがのことに死んだと。そこに祀られて、祠があつて、やつてますけどなあ。(そこに清水の湧く井戸が) ええ。井戸つたつて、小さいこれぐらいのもの。最近、毎年立石祭りを、よそからも来おつたですけどなア、今もうわりあいと少ないですけどな。以前はたくさん詣つて来よつたです。村外からな。(タツボの白蛇は) ええ、話は聞きました。それを、お詣りに来た、先志摩とゆうんですけど、船越やむこうのほうをなア、その、何村かしらんけど、その信者さんがお詣りに来て、それを見て、うちへ帰って、急にわづらいになつて死んだと、ゆ

う話も、年寄に……。まあそのお詣りに来るのに、立石祭り、前はこの立石さんたくさんお詣りに来ましたでなア、そうゆうついでに、そうゆう話を聞いているもんで、女の人が、男の人は詣りませんけどなあ、女の人が、たえず詣りおったです。立石さんとそことは、関係はないんじゃないかと思えます。

(神社は西井戸の水を使った) ええ、すべて。今、も使いませんけどなあ。それは、個人のなア、井戸なんですわ。西井とゆううちの井戸、西井井戸ですわ。井戸ちゆうて、昔のその、岩のかけたような、そういうなとこですけどな。そこも、正月前、きれいに掃除してですな、こちら、誰彼にもそれを一杓ずつ、汲んできて、使いおったです。私ら若い頃は使ってみましたけど、もう行く道もこわれてしまってますもんでなあ。(若い衆と杜氏との応酬に出てくる) 当年の神酒を持ってこいと、請求するでしょう、若い衆がなア。すると持ったお神酒が水臭いとかなあ、そうゆうことなんです。「当年のお神酒は西井戸が多過ぎる」とか、そうゆうなを……。

(立神の由来は) うちの親たち、年寄りに聞いたのは、天照大御神がここへ来られてですなあ、おしてまあ、朝早く出発せられたと、神が立って、で神明で夜が明けたと。まあ、こじつけどと思いませんけどなア。(その他の祭りは) 神社では、天王祭だけですわな。それは七月の十四日。天王様とゆうのは須佐之男命ですから。

(例祭はきのうの他には) いや、ここはもう、例祭は一回だけです。例祭はまあ大祭としてやっていますわなあ。例祭と祈年祭、それか

ら勤労感謝の、昔の新嘗祭、その三回だけが大き祭で。

(立神の生業は) まるっきり農業です。現在は養殖で、半農半漁。(大工は) ええ、出稼ぎに。一人、長谷川ちゆうな、この人が有名だったらしいですわ。年中、それを職業として。ここでは仕事少ないもんだから、大阪方面へな。

(正月迎えの飾りは) うちの前にはトシトキサンてゆうてな、年越しの松を、大きな松を。門松ともまた違うんですわな。うちの前へ。庭先にな。(ツボキは) あれへお供えするんですわ。であの箸が、竹の割ったやつへ白い紙挟んで、あれへお供えするんです。御飯です。各自みな、あれをお正月、うちにみなやっています。白い御飯に、ナマスとか、他に珍しいもの、おかずを添えて、そういうもの付けて。一日のジンジメシってゆうてな。そしてこの、お獅子さん舞う日に、朝まあお供えしますわなあ。そしてまたジンジメシとゆうて、三時頃まで御飯炊いてなあ、神事のある時にだけ供える。一日・三日、この神事のある時に。(神社は鳥居で、各家は) 祠がありますわなア、それ、両側へ、やっていますし、門松、トシトキサンへも。ツボキは、井戸のだけは、井戸神さんてゆうてな、こいつを二重にしたやつを、使うんですわ(↓写真31)。(正月棚は) いや、そういうものは作りません。平素の神棚へ、お供えしますけど。それはあの、お餅と、供えますわな。蜜柑とか串柿、そういうものを。(部屋に田の神様のための飾りは) ああ、あります。この村では、ユズリの木をなア、浄めて、そしてお餅・蜜柑・串柿・タツクリ、ああゆうようなものを、ワラヒボで、

そしてさげますのや（↓写真32）。どこで、そのうちのつごうで、めいめい違ったりしますけど。

（大晦日に豆撒きは）前はやったけど、今はもうほとんど、やらなくなっただんでないでしょうか。うちは、こうしたなをやっていますので、やかましゅうゆうてやらせてますけどなあ、大晦日と、それから節分。（その呼び名は）オニホリ〜と。いやあの、藁でなア、あの、これぐらい（一尺五寸？）の太さに藁を二つに折り曲げて、そして足を付けてなア、そしてあの、紙へ鬼の顔を描いて、そいで豆をうちん中へ、まああのエビスサンの神棚ありますわなア、そこへ豆をうって、それと床の間へうって、それから土蔵、長屋があればぜんぶそこへ豆うって、そして最後に、うちの庭へ、立ってすなア、うちん中へ豆を撒いといて、それから「鬼は外〜」、そくい文句。しかしもう、ほとんどこの頃は、やらんでしょう。豆撒くうちはあるかしりませんけどなあ。大きな声で「オーニハ外〜」やりおったですけどなあ。大晦日はわりあい遅いですわ、十時、十一時頃。節分はもう早いですけどなア。しかしもうほとんど、やっておらんじゃないでしょうか。（大晦日に正月の火を新しく焚くことは）新しいとゆうより、ここではなあ、大つごもり、正月の切り替えに、ヒガエとゆうのをやるんですわ。ヒガエとゆうのは結局、こうゆう古い灰がありますわなア、これをもう掻きのけたって、新しく、火も、灰も替えますわなア、そしてもう、朝炊いた御飯は、大つごもりの朝の御飯は残ったっても、それはもう捨ててしまつて、そいで午後から正月の餅、ジンジ

メシとか、ヒガエとそれを、やっていますけどなあ。もう今、若い人は、そくいことやらぬうちもあります。

（正月三日に嫁・婿が実家に挨拶に行くことは）そうゆうなには、ないですなア。うちによってまあ、婿さんを、正月だから呼ぶと、ごちそうして、それは確かにやっていますけどなあ、ちゃんとその服著けてなあ挨拶に廻る、そうゆうのぜんぜん、この村ありませんなあ。（ウスモチを持って行くことは）ああヒトウスモチ、親の。それはあの、自分の家内もろうてきますわなア、そこへ、正月のお礼に。まあ、正月に。一日・二日に。搗くのはもう、そのうちのつごうで、まぢまぢですけど。早いうちはもう、二十五、六んちから始めるでしょう。

○ A・B家の正月飾り（昭和五十九年一月三日）

（このトシトキサンの草木の意味は）イチイチ、サカエ、モチ、ユズルと。（数は）これはなあ、二つのうちもありますし、五つのうちもありますし。（立てる位置は）これはもううちの前にな。（ツボキ）あれはもう一つですけど、井戸神さんの場合は、これが二つ。今年はこちらと早く作ったんですけど、飾った日が、三十んちの日がちょうどいい日でしたもんで、三十日に飾りました。大安とかさうゆう。なるべくそのほうがいいかなあと思うて。ほんとうは三十一日にやるのが、ほんとうやと思うたんですけどね、日柄もええ日がいいかなと思うて。これはモチです。モチと榊と。（新薬で）はい。（家の中で、ユズリは七枚）榊の木で。カシコク、モチ、ユズルてね。杵で餅搗く頃はな、小豆の炊いたのを、入れてな、でその小豆色の餅を搗きよつた

もんだがな。そいでこんなんもうみな飾りよったんやがなア。(これがユズリで、餅と蜜柑と干柿と。この餅、白いのと) そちら草餅(四種類)。そいでその前はほれ、千石餅とゆうの(入れたわけ)。今もう搗かんで、器械で……。 (以下はメモ) 木はミズタマ。楠に似ている。千石餅を搗く時には、掻い取りが「千石」、搗く人が「万石」と言っ
て搗く。砂糖は入れず、小豆を入れて搗くと赤い餅ができる。二個ずつ、どこでも祝いの所に飾る。エビス・大黒・守り本尊・仏壇など。
元旦に若水汲みのあと飾る。十二月十三日を十三日正月といい、松ハヤシに行く。十三本だけ。「切る」とは言わない。十二月二十五日から三十日に松ハヤシ・松・ユズリ・榎・柿・モイチの木。カドガミにはツボキの中に柿の葉と竹の箸を添える。ミテグラハシで、ユズリの葉を十文字にする。ツボキは家族の数だけ。飾りの意味は、入口に向かつて左のはカタクモチユズル、右のはダイダイモチユズル(柿)。

おわりに

民俗採訪はできるだけ精確に、総合的でありたいと思う。学術的にそうであることはもちろん、その民俗を伝承している人々の将来をも考えてのことである。それでこれまでにとってきた報告の方法は、ま
ず自分の目で見たものを正実に文字化し、それを写真・録音で補足し
てまとめることであった。特に話者のことばはその人の息遣いをたい
せつにしよと心がけた。今回も本文中に聞き書きが入れているのは

そのためである。しかしこの方法は、時間がかかり過ぎ、しかも多くの紙数を要する。そして文字化する段階にはすでにさまざまな不十分さを思い知らされてしまう。それでもあえてこうしたまとめかたをしているのは、伝承者の誠意につとめて応えたいと念ずるからである。かなりの疑問を残したままの小稿に、そうした意図を読み取っていただけの点があれば幸いである。

立神の平古宮司にはここに載せた話の他に、行事次第の細部についても詳しく聞いている。また、文書の翻刻にあたっては多くの誤読をしている箇所もあるかもしれないし、不分明な表現もある。それらは今後の補訂まで待たれたい。

実は、昭和六十年の大晦日から今年の一月四日まで、みたび志摩の正月行事を見て廻った。ここに載せた所のものの他に、片田・船越・国府などをも新たに訪れた。不確かだったものは漸く大要をつかむことができ、新しく火祭り・獅子舞をとおして正月とはなにかを考
えることができた。次の機会にはそうしたものを含めた資料をまとめ
ることになる。末筆ながら、お世話になった各地の方々から御
礼申しあげる次第である。

○ 平古家文書

(1) 当村鎮座宇氣比社神事概要

和装・袋綴・仮綴 一冊

二四・四 cm × 一六・四 cm

〔外題〕 当村鎮座宇氣比社神事概要

〔筆者〕 不明。表紙左下に「社掌用」と

あり、その左脇に別字にて「平古」とある。平古周宮司によれば曾祖父平古千代内かという。

〔奥書〕 なし

〔丁数〕 墨付二十枚一面九行

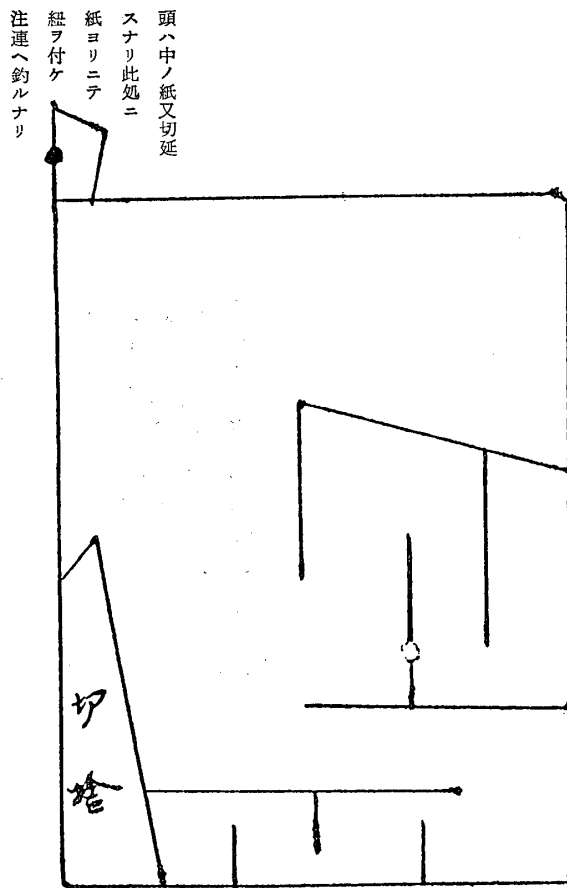
〔備考〕 所々に墨・朱・鉛筆・サインペン等の書き込みがある。鉛筆・サインペンは平古周宮司によるものという。

注 翻刻にあたっては各行の字配りはそのままとし、旧漢字・異体字・変体がな等は通用字体に改めた。

(表紙裏)

正月一日御獅子殿ノ注連一ノ鳥居ノ注連へ付ケル人形シメノ立形

美濃一枚ヲ二ツ折ニナシ是レヲ又二ツニ折リ即チ四ツ折ノ事



上図ノ如ク立チ四ツ折ヲ
二ツニ開キテナスナリ

頭へ中ノ紙又切延
スナリ此処ニ
紙ヨリニテ
紐ヲ付ケ
注連へ釣ルナリ

(一オ)

当村産須那神社之旧祭典勳次第

旧正月朔日昼後支度シテ宮エ出ル産須那ニテ手ヲ洗

神前エ参詣濟テ鳥ノ前ノ方行礼式挨拶致シ神樂

座ニ着九人衆神役人ノ内早イ御人ニ礼致ス又九人衆一

人ニテモ御出有バはゼヲ呼ビテ武久汐ト土器ト一夜造ヲ取リ

武久汐は神殿ノ前ノ板エ上置ス次ニ御酒ヲ神殿中若

宮様迄木ノ葉ヲ敷テ当番ノ人ニ供指ス宮守中井宗

太殿ヨリ拵タル御供餅ヲ凡七八分角位イニ切置九人衆神

役人中皆揃イ候えは御酒切菜長菜盃相濟候え

(一ウ)

は鳥ノ前ヲ呼唯今鳥ノ前ヲ仕ルト挨拶スル事ヲ教ル

鳥ノ前九人座ニ行テ右ノ如く挨拶ス次ニ御獅々様ノ含メ

物ヲ出シテ鳥ノ前ニ頂ス鳥ノ前頂テから上封魚ヲ鳥ノ前

ニ持セ上封者ノハ元ノ通り御獅々様エ納置次ニ九人衆か元

中井宗太殿か武久汐ニテ神殿中ヲ清メ前ニ切置タル餅ヲ

供指ス神官神前ニ進ミ立拜二度居拜二度拍手一端

幣ヲ左右左ト振切麻モ同断破シテ居拜二度立拜二度

拍手兩端次ニ鳥ノ前ヲ幣ニテ左右左ト清メ畢テ三拜

進テ祝詞奏ス畢テ居拜二度立拜二度拍手兩端畢

(二オ)

テ元ノ神樂座着拍子ニテ座拜致シ旧御神樂ヲ唱

神明始ル新玉之御門に五葉の松逸子松

は祝ひの者ン成れば千年千代ともさかへたり

アイヤア神明始る新玉之御門に五葉の松

逸子ン松は祝ひの者成ればアン千年千代ともさ

かへたり新しき年の始の朝男ヨアイヤア朝男

飛もて参り美濃の白絹美濃々白絹面白や

千秋萬歳か重りてン祝ふが門には龜が舞

遊ぶン雲之上には鶴がすを掛てン其末の又

(二ウ)

其末の末の世迄も頼母しくとこそ覺たり

すずり葉の若狭に神飭られてン年は行と

もつねの徳若ン抑今年来ル年の年号ハン

何ノ何年大歳は^十支^千入月の並びが十二月^{閏年}三月日

の小数ハ三百五捨四日^{閏有ハ}三月八十四日正月一日只今日は開

き地はかたまりてン白金^{シロカネ}に花咲黄金^{サキコ}に実

成吉日ン良辰を撰ひ定メて参らするンこめ聞食

よ玉の御宝前春のかすみハ雪衣モめぐみの

いとりにとひしかは喜に尚喜を重ねれば

(三オ)

共に嬉しき者に成ける新しき年の始ヨウヲ、アイ

ヤア朝男ヨアイヤア朝男飛もて参リア、アイヤア美濃

の白絹神明始ル新玉之御門に五葉は松逸子松ハ祝

ひの者成れば千年千代共さかゑたり君ハ御前祝

して安穂の参り々々さむらを鶴と亀との祝して安

穂の再拜爰に心をおはし舛とアイヤアサ△イヤア神明始ル

あら玉之ヨイヤア御門に五葉ヲは松逸子イヤア松は祝イ

の者ン成ばイヤア千年千代共さかへたりイヤア新ラしき

年の始のヲ朝男イヨイヤア朝男飛以参り美濃の白

(三ウ)

絹イヤア喜に喜をヲかさニぬればイヤアかさぬればともに

嬉しき者に成ける猶喜びおイヤアサ

右御神楽ヲ唱エル内に前ニ切置タ御供餅ヲ二ツヲ又二ツ宛ニ

切土器式枚重ネ其上ニ井筒組其上ニ一夜造載膳杓枚置ミキ

揚ニ入用御酒揚巻辺ニ銚子ノ一夜造ヲ三度宛ツグマネヲシテ

夫ヲ山ノ神様エ土器共供エ指セル其御酒揚言葉

神明様の御前の御すものみすきは山のはありるら山の

はり山のはり山のまりヤアツきまちたりるらはりハいのほ

りはこの心まし舛酒もれよ酒屋の子共たんごしやうゑ

(四オ)

いやあ造りすましたんごしやうのはすかれん

きやう家内が造ル若酒ハながれなるルとはリハこんの

右御酒揚の言葉宇気比様ト惣末社ト山ノ神様ヲ唱エ終テ

其御供ハ山ノ神様エ供エ指ス次ニ鳥ノ前ヨリ含メ物ヲ受取元ノ通り

御獅々様エ納次ニハゼヲ呼配膳式枚エ獅々舞小踊ノ装束ヲ改

面ト烏帽子共渡ス次ニ獅々迎イ是ハ元社人カ九人衆カ致ス獅々

舞々絹ノ中ニ入拜礼済候えは御獅々様ノ含メノヲ取獅々殿

ニ置是ヨリ御酒ハ当番ノ帳ニ有通り取盃ノ時は鳥ノ前挨拶

サセル取盃楽打笛籟惣拜殿盃済候えは鳥竿ヲ

(四ウ)

拜殿ノ内ニ取九起ノ終マイ鳥ノ掛物前ニ積又ハ中啓エ銭ヲ付テ

御獅々様ニ含メ掛物鳥モハゼモ相済候えは打込ノ支度ニ鳥

の前ヲ呼打込ヲ致シ坐ト挨拶ヲサセル又鳥ノ前ノ時ノ通り含メノヲ

頂ス始ノ如く上包魚ヲ持セ鳥ノ前雷ニテ其含面ニテ招ク其時

九人衆カ獅々舞ニ打込ヲ告ぐ次ニ楽打笛籟エ告グ御獅々様

拜殿ノ中ニ入込時鳥ノ前廻テ含面ヲ御獅々様ニ納ル様ニ教ル終

舞衣ヲ獅々殿エ納メ九人衆共獅々舞小踊装束面烏帽子

共改受取納ル畢テ九人衆カ元社人カ前ニ割置タ御供餅ノ

残ヲ老人前ニ二切宛拜殿一同小踊迄渡ス前ニ取置タ一夜造

(五オ)

と土器二枚ト武久汐ヲ若宮エ送ル是ハ当番ノ女ニテモ由拜殿一

同御酒肴ハ俵物沢山ニテ頂ク済テ一同押込致ス次ニ鳥ノ前

の方エ行テ挨拶シテ退ク鳥ノ前モ若宮八幡エ参ル先神前エ

参詣若宮ノ守北条源太殿ヨリ出ル御供餅大宮通り割ス

九人衆武久汐ニテ清メ御供ヲ供指ス御神楽は大宮通り

御酒揚は豊愛様ト八幡様ト惣末社ト山ノ神大宮通り也

御供餅モ大宮通り若宮一同ニ二切宛鳥ノ前迄済テ一同押

込畢テ相濟候ノ挨拶退ク夫ヨリ秋葉様迄参詣

正月元日御神事あらし書□□

(五ウ)

旧正月四日御神事行事次第

昼時分支度シテ宮エ出ル産須那ニテ手水神前エ参

詣濟テ朔日通り鳥ノ前エ其日ノ挨拶致シ神楽座着朔日

通り早イ人ニ礼ス次ニ武久汐土器一夜造改取朔日通り武久汐

ハ神殿ノ前ノ板エ上置ス次ニ朔日通り御酒ヲ神殿中若宮様

迄供エ指ス次ニ幣紙ヲ取美濃紙式帖沓帖宛帯シテ苧

幣串竹紳ノ枝ヲ添紙ハ合シテ改取鳥ノ前踊ル時持幣

式本但シ沓本ニ付紙八枚宛ニテ立ツケン先エ米ヲ入紳枝付

苧ニテ結ビ幣串ノ竹ヲ紙ニテ巻紙ヨリニテ結ビ神殿前ニ建ル

(六オ)

次ニ御供小判ヲ九人衆ト共ニ取神楽座ハ四拾五枚

九人座ハ三拾六枚改数ヲ見ル若大われうすき所有ハ

当番ニ改□指ス当番ニ用意無時は九人衆ノ内ニテ□ル

事モ有也次ニ祓米ヲ三升幣米三合取此幣

米ハ膳エ入置宮守渡ス九人衆神役衆打笛籥

拜殿ノ役員皆揃イ候エハ座拜式係ル敷藁

沓献切菜式献長菜是式献土器盃也三献メ

ヨリ後汁椀盃三献鯨此鯨ハ膳沓枚エ式尾宛

背腹ニ置酒ノミヲ載箸ヲ付盃ノ膳ヨリ先ニ出ス此盃

(六ウ)

座拜中相瀧ト鳥ノ前ヲ呼御膳支度スル挨拶指セル

鳥ノ前東ヨリ西エ順々ニ御膳支度致坐ト挨拶シ又

小屋ノ内エ入テ左繩ノ綿襷ヲ右エ堅綿襷ニ懸テ亦

西ヨリ東エ順々ニ且今御膳ヲ上坐スト挨拶ス次ニ神

職ト元社人カ亦ハ九人衆カト東ヨリ西エ順々ニ御膳ヲ供

坐ト挨拶シテ鳥居ヨリ神前進ミ坐ス鳥ノ前含面

シテ御供御膳ヲ持来夫ヲ改沓膳ハ飯式ツ重ネ沓膳

ハ飯沓ツ土器エ鯨トワタガセノ魚ヲ紙ノ帯シテ汁椀エ味噌ト

塩ト入木ト竹ノ折箸付注連繩エシテ紳ヲ付御供エ掛ル

(七オ)

皆揃候エハ神職九人衆カト含面シテ神殿エ夫ヲ供

立拜二度居拜二度幣ヲ左右ト振切麻モ同断手

一端祓詞畢テ祝詞畢テ旧ノ祝詞畢テ御膳徴ス

其御膳ヲ少シ取テ食ス次ニハゼヲ呼デ其飯ノ重ネ沓膳ヲ

半分切当番ニ渡シ夫ヲ九ツ切テ沓座ニ沓切宛膳沓枚

ニ載箸付テ出ス四献肴是也神職九人衆神前退ク

又西ヨリ東エ前如ク挨拶ス畢テ座拜座着四献盃

濟五献ハ其座下ニ当番九人揃銚子ノ口ヲ紙ニテ包ミ

礼ス座拜式終元拜殿座着座直シ盃肴ハ俵物

(七ウ)

其盃濟ト朔日通り鳥ノ前ヲ呼鳥ノ前仕カ祭ト挨拶サセ

又朔日通り含面ヲ頂ス今日は幣有故取テ元通り納置
 旧社人か九人衆武久沙ニテ清メ御供小判供エ朔日通り
 拍子ニテ御神楽四季ト高之御前ヲ唱エ其御神楽詞
 アイヤア四季にすぐれてやさしきハイヤア三月三日の
 桃の花酒イヤア五月五日の若しよふやイヤア九月九
 日の菊の花酒イヤア霜月例酒はわかんながしやイヤア
 合せてめすこそたとけれ定法は先ハ打とけ
 参らすこめきこしめせよ玉の御宝殿

(八才)

アイヤア高之御前のめすものはイヤアきりうや
 中頃ほろのそやイヤア吉事ぬかまきあやのこて
 イヤア悪事をはるふは弓ト矢トアイヤア高の
 御前のめす物わんきりうや中頃ほろのそや
 吉事ぬかまきあやのこてン悪事をはるふは
 弓ト矢ト高ニてもン宮をみほろすヨヲアイヤ白鳥ヨ
 アイヤア白鳥はなを高にてもヨヲ、アイヤ光リまし
 舛光リまし舛ヲモ白いろや此御神楽と申参らす
 るはハンわたくしならぬ御祈祷ニてン天長地久御願

(八ウ)

円満具□安穂の御祈祷ニてン千代の御神楽を
 まいらする御神楽の□うこそひぶき大ぞらに
 あまのみくちは今ぞひらくらん岑におう

しんな八柱大神ン小松の中にぞ御はし舛小松
 の中にぞましまさはン衆生の願ひはみて、給ふ
 八柱大神峯にとゞみぞおわします三す吹あげ
 のさふきところ風にすぐれてやさしきハン
 三西秋北春南ン冬木枯の風吹ば峯よりおりくる
 しは車此御前ニ参れば鈴玉影もよし祈も

(九才)

叶ふ千代の世をへる 高ニてもン宮をみほろすヨヲ、
 アイヤ白鳥ヨアイヤア白鳥は猶高ニてもヨアイヤ光り
 まし舛高之御前のめすものはきりうや中頃ほろ
 のそや吉事ぬかまきあやのこて悪事をはるふ
 は弓ト矢ト君は御前祝シて安穂の参り々々さむらを
 鶴ト亀との祝して安穂の再拝爰に心おおはし舛と
 アイヤアサ△イヤア高之御前のヲめすものはイヤアき
 りうや中頃ほろのそやイヤアよき事ぬかまき
 あやのこてイヤア悪事をはるふヲはゆみとやアと

(九ウ)

イヤア高ニても宮をみほろす白鳥ヨイヤア白鳥は猶
 高ニても光リまし舛イヤア光リまし舛此御神楽
 と申参らすハ私シならの御祈祷ニて天長地久
 御安円満□□安穂の千代の御神楽を申参
 らするイヤア喜に喜をヲかさにぬればイヤアかさ

ぬればともに嬉しき者に成けるとイヤアサ

右之御神楽ヲ唱エル内に小判杓枚ヲ少シ宛四切、て朔日通りニ

井筒土器式枚上置其上ニ一夜造リ載ミキ揚ニ用ル美喜揚は

宇気比様ト総末社ト山神様ヲ唱エ其御酒揚言葉

(十オ)

朔日神明様下に有通りヲ唱エ其終リは朔日通り山神様ニ供

エ指セル相濟候えはハゼヲ呼膳式枚ニ獅々舞小踊の装束ヲ

改メ朔日ノ通り渡ス次ニ獅々迎イ畢テ獅々様ノシデ杓頭に

七ツ位イ宛杓ツ付式枚宛ニテ建置シデは杓ツ宛紙ヨリ

ニテ括リ四番起ノ時迄ニ拵置苧モ少シ宛付ル御酒は杓

起相濟候えは俵物朔日通り也前ニ取置タ祓米ニテ楽

打笛籟人当屋小舛ニテ杓倍宛神楽座ヨリ拂此拂

米は楽打笛籟人以上式人也二起相濂トけすり物盃

朔日通り也三起相濂ト前ニ建チ置タシテヲ御獅々様ニ

(十ウ)

付ル御酒朔日通り取盃時鳥ノ前ノ挨拶鳥竿モ朔日

ノ通り也朔日祓前は宮守中井宗太殿ヨリ拂前ニ取

置タ小判餅式拾杓枚土器式枚武久汐一夜造若宮

ニ朔日通り送ル浚は朔日通り大宮相濂候えは若宮

へ参詣先若宮ニテ前ニ送り置タ御供大宮通りニ武

久汐ニテ清メ御供さセル神職進ミ拜シテ祓詞奏ス次ニ

拍子ニテ旧御神楽若宮ヲ唱エ其御神楽詞

アイヤア若宮三所作るにハイヤアかやくのえツリに
のいふきをイヤアしる金まじりのしけだるき

(十一オ)

イヤア小金のとびらにみす々だれ△アイヤア若
宮三所作るにハンかや、のえつりにのいふきをシ

しる金まじりのしけだるきン小金のとひらに

みす、だれ。若宮のン夕日はいくつやうを、アイヤ

左八ツハイヨアイヤア左八ツ右は九ツヲンヲアイヤ中八十六中

は十六をもしいろや。若宮三所へ参るにはンおまへ

の馬場より参られよンそれらをしづかに参られ

はン衆生の願ひハミテ、給ふ此ノ御前へ参れば

鈴玉影もよし祈も叶ふ千代の世をへる

(十一ウ)

たちハ中勢の花子供ン、館たちから宮へハ瀧河ノン

あやのうわきをめし重ねントまいりをす

るこそたんとヲけれ土の座にあた、め給ふ

宮のヲ前夕坂かげ葉に御座やアまし舛所に

て神信心の初め参らするハン一の禰宜人

杓檜式檜諸家シヤアイ衆諸共キョにン居らせ玉ふオ迄ン

夜ルの驚フシキきなく昼のさわぎなくン我守りまし

ますと祈りあふする年行とも世もたじろ

かし此所神やなかこと聞あひつきうまし舛あひつきおきて

(十二オ)

空^{そら}みれバン小金まじりの雨がふるン其雨ふりて

のその後^{ノチ}ハン皆人長者に成とヲかやア大河の一

の鳥井を見る時はわれこそ禰宜にならまほしけれ

若宮のン夕日はい[△]くツウヨ、アイヤ左八ツヨオアイヤア

左八ツ右は九ツアイヤ中ハ十六若宮三所作ルニハかや、

の多つりにのいふきを白金まじりのしけたる

き小金のとびらにみす、だれ君は御前祝して

安穂の参リ々々さむらを鶴ト亀との祝して安穂

の再拜爰に心をおわし舛とアイヤサア△アイヤア若宮

(十二ウ)

三所ヲ作ルにハヨイヤアかや、のヲえつりにのいふきを

イヤアしる金まじりのしげだるきイヤア小金

のヲとびらにみす、だれイヤア若宮の夕日はい

くツウ左八ツイヤア左八ツ右は九ツイヤア右は九ツウ中ハ

十六イヤア喜に喜を、かさにぬればイヤアかさぬれバ

ともにうれしき者に成けりとイヤアサ

右之御神楽ヲ唱エル内に大宮通り小判餅壹枚ヲ少シ宛

四切々て土器貳枚重ね其上ニ井筒組其上ニ一夜造り載ミ

き揚ニ用ユみきあげは八幡様ト惣社ト山神様ト唱エ其御

(十三オ)

酒揚詞朔日の神明様ノ御神楽詞ノ下ニ有通り八幡

様ト総末社ト山神様ヲ壹度宛唱エ終は大宮通り

土器共山神様ニ供指ス次ニ宮守北条源太殿ヨリ

拂米畢テ一同押込ミ濂デ退く夫ヨリ秋葉様

迄参詣相済候先四日ノ神事行事有増書記

置候也

同五日神事勤ル行事次第

昼時分支度シテ宮エ出ル産須那ニテ手水神

前ニ参詣済テ朔日四日通り鳥ノ前ノ方行其日ノ

(十三ウ)

挨拶致シ畢テ神楽座ニ着朔日四日通り早イ人ニ礼

ス次ニ朔日四日通り武久汐一夜造り土器取武久汐は

前ノ通り神殿ノ前ノ板エ置ス次ニ御神楽祓米を六升

三合取此三合は四日ノ通り膳エ入注連揚ニ用ニ次ニ

朔日通り御酒を神殿中若宮様迄当番ニ供指ス九人

衆神役楽打笛簫拜殿役員皆一同揃イ候え

ば注連揚ノ式ヲ勤始ニ鳥ノ前を呼ビ素袍着九人揃エ

鳥ノ前ニ長々の業御苦勞デ御座リ増タが今日は丸注

連ヲ納メ舛ニ仍て丸注連ノ前ニて拝をシテ引□成ト云神官モ

(十四オ)

拝ス素袍着九人は丸注連之前ニ坐ス獅々迎スル人神

楽座ニテ含面シテ居楽笛の拍子ニテ三度居拜シ

前ニ取置タ三合ノ注連揚米ヲ膳ニ入持テ立廻ル時ニ

時成畢テ丸注連ヲ納メ其丸注連は当番之素袍

着九人ニテ一ツエ五人一ツは四人南エ一度北エ一度又南

エ両方共同様ニコカシ納メ畢テ朔日通り御酒一献切

菜二献長菜此二献盜濟ト朔日四日ノ通り鳥ノ前ヲ呼

鳥之前を仕リ舛ト挨拶サセ次ニ御獅々様ノ含メ物ヲ出テ

鳥ノ前ニ頂ス亦取テ元の通り納メ置九人衆か元社人か

(十四ウ)

前ニ取置タ武久汐ニテ神殿ヲ清メ神職神前ニ進ミ

立拝二度居拝二度幣ヲ左右左ト振切麻モ同断手

一端破シテ又幣切麻元同断朔日通り幣ニテ鳥ノ

前ヲ左右左ト清メ畢テ居拝三度シテ祝詞ヲ奏ス畢

テ居拝二度立拝二度拍手両端終テ元ノ神楽座ニ

着楽笛之拍子ニテ坐拝シ旧御神楽四季高之御

前熊野々御神楽ヲ唱エ其御神楽詞

アイヤア四季にすぐれてやさしきハイヤア三月三日の

桃の花酒イヤア五月五日の若しやうふやイヤア九月九

(十五オ)

日の菊の花酒イヤア霜月例酒はわかんながしやイヤ

ア合せてめすこそそたとけれ定法は先ハ打とけ

参らするこめきこしめせよ玉の御宝殿

アイヤア高の御前のめすものはイヤアきりうや

中頃ほろのそやイヤア吉事ぬかまきあやの

こてイヤア悪事をはろふは弓ト矢トアイヤア

高之御前のめす物わんきりうや中頃ほろ

のそやン吉事ぬかまきあやのこてン悪事をは

ろふは弓トヲ矢ト高にてもン宮をみほろすヨヲヲ、ア

(十五ウ)

イヤ白鳥ハヨアイヤア白鳥はなを高にてもヨランヲ

アイヤ光りまし舛光りまし舛面白ろや此御神

楽と申参らするわんわたくしならぬ御祈禱ニてン

天長地久御願円満□□安穂の御禱ニてン

千代の御神楽をまいらす御神楽の□□こそ

ひゞきを、ぞらにあまのみくちは今そ開らん

岑ミナにおうじんな八柱大神ン小松の中にぞおはし

舛小松の中にだましまさはン衆生の願ひはみて

て給ふ八柱大神峯にとゞみそおわしますミす

(十六オ)

吹あげのさふきところに風にすぐれてやさ

しきハン三西秋北春南ン冬木枯の風吹は峯

よりおりくるしは車此御前エ参れば鈴玉

影もよし祈も叶ふ千代の世をへる 高

にてもン宮をみほろすヨヲ、ランアイヤ白鳥ヨアイヤア

白鳥は猶高ニてもヨアイヤ光りまし舛高之御

前のめす物はきりうや中頃ほろのそや吉事

ぬかまきあやのこて悪事をはるふは弓ト矢ト
きミは御前祝シて安穂の参り々々さむらを鶴

(十六ウ)

と亀との祝して安穂の再拜爰に心をおは
し舛とアイヤアサ△イヤア高之御前のヲめすもヲの
はイヤアきりうや中頃ほろのそやイヤアよき
事ぬかまきあやのこてイヤア悪事をはるふは
ゆみとやアとイヤア高ニても宮をみほろす白
鳥ヨイヤア白鳥は猶高ニても光りまし舛イヤア光リ
まし舛此御神楽と申参らするハ私シならの御
祈祷ニて天長地久御安田満□□安穂の千

(十七オ)

代の御神楽を申参らするイヤア喜に喜をヲかさ
にぬれはイヤア重ぬればともに嬉しき者に成け
るとイヤアサ 此御神楽唱終其假元権現御神楽
唱ル其御神楽詞爰に云
アイヤア熊野々神社ハ此頃ハイヤア若野屋浦ニゾ
御座スイヤア若野屋浦ニダマシマサバイヤア衆生ノ
頼ハミテ、タマウ○アイヤア熊野々神社此頃ハン若野屋
浦ニゾ御座スン若野屋浦ニダマシマサバン衆生ノ頼ハミテ
テタマウ熊野にはン結ぶ□玉ヨヲランオアイヤ家ど
神子ヨアイヤア家と神子成玉童子のヲンオにやく

(十七ウ)

ち此前にやくち此前面白ヤン抑々熊野と申
参らするハン昔生国の鎮守大王慶旦の主
にてまし舛がン衆生エ化度のために御年七歳と
申する春の頃我朝に飛うつり玉ふン先所
は豊後豊前筑後とてン三ヶ国の鏡めにン北
野山彦山と申所に飛うつり給ふン爰もふん
ないせばき所とてン紀伊国や□の郡清き新
宮音なし河の川上にンかしの木三本の上に飛う
つり給ふン夜八月とも現じ昼八月ともあらはれし

(十八オ)

或時は一万の鳥十万の鷹とも現し給ふン或時は
長サ壹丈五尺の熊ともけんじ給ふン亦或ときハ御
垂跡とも現じ玉ふン夫から小河に打越へてン先
壹番に太夫が松しぼのせきンおんとう越へとハ
是とかヤン中に大塔の塔ありてン夫を拜ぬ人
もなしン朝日さす夕日かどやく熊野出てン出
雲か岳に熊屋振らん抑熊野と申参ら
するハン新宮本宮那智十二社迄ン請し鎊り
まいらするこめきこしめせよ玉の御宝前
(十八ウ)
熊野にはン結ぶ□玉ヨヲランオアイヤ家ど神子ヨアイ

ヤア家と神子成玉童子のやくち此前熊野

の神社此頃ハ若野屋浦ニゾ御座若野屋浦ニダ

マシマサバ衆生の頼ハミテ、タマウ君は御前祝して

安穂参リ々々さむらお鶴ト亀との祝して安穂の

再拜イヤア熊野々々神社此頃ハイヤア若能屋浦ニゾ

御座ス若野屋浦ニダマシマサバイヤア衆生の頼ハ

ミテ、タマウイヤア熊野には結ぶ□玉ア家と神

子ヨイヤア家と神子成玉童子のやくち此前ンイヤ

(十九オ)

ア喜に喜をかさにぬれバイヤア重ねれば共に

嬉しき物に成けるとアイヤサ 此御神楽

ヲ唱ル間に土器二枚宛重ネニツエ元取置タ一夜造ヲ載テ

膳壹枚エニツ並テ御酒揚ニ用ユ御酒揚は宇気比様

と熊野神社ト惣末社ト山神様ヲ唱其詞

宇気比様の御前の御すものみすきは山のはありる

ら山のはり山のまりヤアツきまちたりるらはりハ

いのはりはこの心まし舂酒もれよ酒屋の子供たん

ごしやうゑいや造りすましたんごしやうのはす

(十九ウ)

かれんきやう家内が造ル若酒ハなかれなるルとはり

はこんの△熊野様の御前の御すものみすきは山

のはありるら山のはり山のまりやあつきまちたり

るらはりハいのはりハこの心まし舂酒もれよ酒屋の

子供たんごしやうゑいやあ造りすましたんごしやう

のはすかれんきやう家内が造ル若酒ハなかれなる

るとはりハこんの△此御酒揚詞惣末社山神右之通り

唱エ是ヲ唱エル時銚子ノ一夜造り残を御酒揚一返ニ右之御供

の土器エツギマネシテ唱エ終は朔日四日通り山神エ式ツ共供置ス

(二十オ)

畢テハゼヲ呼配膳二枚獅々舞子踊ノ装束出シ数改面ト烏帽

子共渡ス獅々迎畢テ壹起相済ト朔日四日通り俵物盃是ヨリ

後昨日通前ニ取置タ六舂ノ米ニテ四日通り楽打笛籥壹人

エ当屋ノ小舂ニ一倍宛神職ヨリ拂盃は四献五献共四日通り五

献目取盃ノ時鳥ノ前挨拶ス鳥竿モ朔日四日ノ通九番ノ末ニ

朔日四日五日共積か又は中啓ニ錢を付御獅々様ニ含メ致ス鳥ト

ハゼノ掛物含メ揃イ候えは鳥ノ前ヲ呼挨拶サセ朔日四日五日共

同様ニ雷ニテ含面シテ御出ト迎ル含メは朔日四日五日共拜殿

ニテ鳥ノ前廻リ納獅々舞へ打込ヲ告は前通り相濂ト舞

(二十ウ)

衣改獅々殿エ納サス獅々舞小踊ノ装束揃候へは烏帽子ト

面迄改獅々殿ノ下ノ棚へ納紙ノ残苧モ同断納置畢テ

九人衆ヨリ八王子ト申錢指五ツ出ル夫ヲ一指取テ宮守ニ渡ス

又同断ヨリ獅々迎料出ル夫ハ二ツ取一ツは宮守渡一ツは

神職エ納四日五日ノ神楽座エ取御神楽米楽打笛籥

エ前ニ云如く拂シテ残は神職へ納相済ト前ノ通り御酒俵物

沢山ニテ出ル其盃相済ト一同押込済テ退ク若宮エハ参詣

致ス計リ秋葉様迄参詣相済先五日ノ神事行事

有増書□申候也

(四) 八王子祭文(写)

原本は獅子殿にあつて神事の時以外は不出。この写しは曾祖父が参考のために書き残しておいた切々のものを綴り合わせたのだという。

祭文

謹請 東父天王

謹請 西母天王

謹請 牛頭天王沙迦陀女

謹請 第一之王子 惣光天王

謹請 第二之王子 魔王天王

謹請 第三之王子 俱摩羅天王

謹請 第四之王子 得達神天王

謹請 第五之王子 良侍天王

謹請 第六之王子 侍神相天王

謹請 第七之王子 宅神相天王

謹請 第八之王子 蛇毒氣神天王

謹請 二十八宿三十六禽十二月星大歳 大將軍

大蔭歳刑歳破歳殺 黄幡神

豹尾神各令八万四千六百五十余神等

若干御部類眷属皆来衆座給

再拜く

散米酒供

年号 月 日

(ハ) (写)

題名不明。(四)同様の写しで別紙に書いてあるという。

当 此時天開地堅銀之花咲金之実生撰吉日良辰

定申給 西天竺吉祥爾成就不返給金剛自在

午頭天王武谷天神波梨采女八王子 如泰山

五岳奉饒給物者

農具菓子御幣香花燈明散供錢切等致

精誠励誠信心之村人等為蘇民将来之

子孫所奉之年料殺物備所一々令納受給

謹而申

元治元年甲子龍舎霜月良辰日

平古千代内 敬白

写真記録



写真 1 家々を巡っての「名告り」(→69頁)

波切——名告り注連切り火祭り

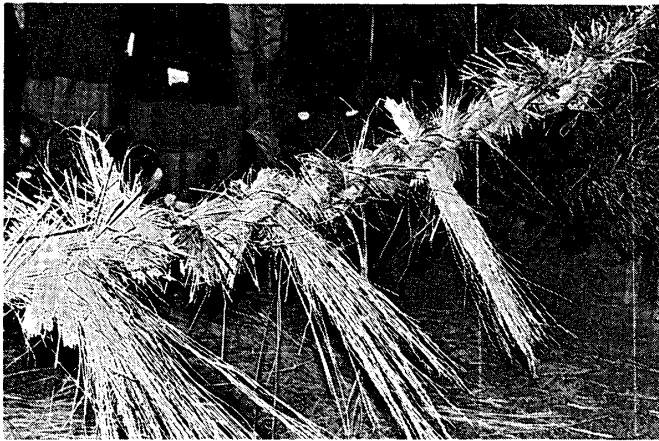


写真 3 道に張られた注連。これを宝刀波切丸で切り落とす(→72頁)

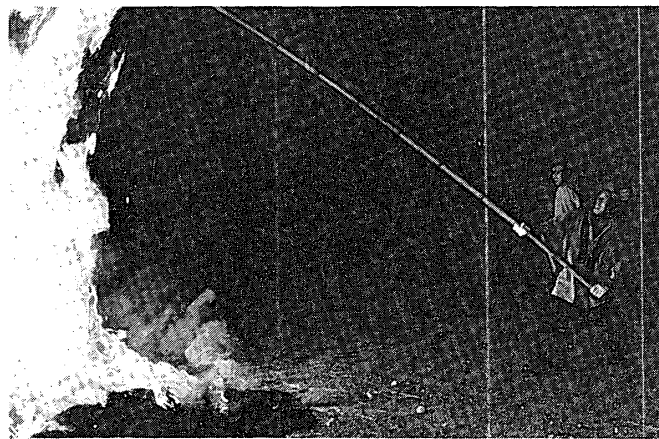


写真 4 アカミで鰹が釣れるようにと祈る(→72頁)



写真 2 出口御山神(→72頁)

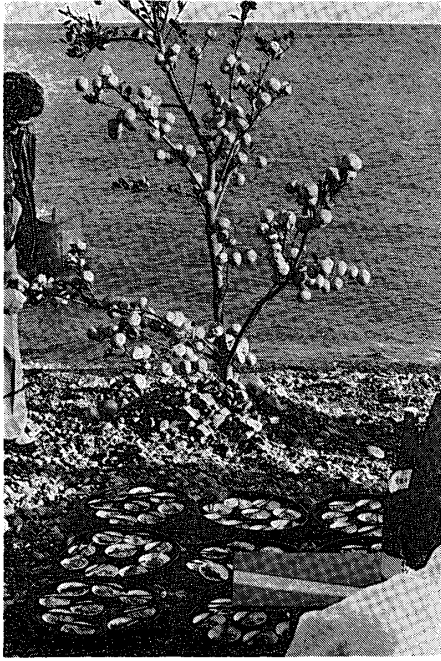


写真 6 東の海に向かって豊漁を祈る (→73頁)

安 乗——ミタナ神事

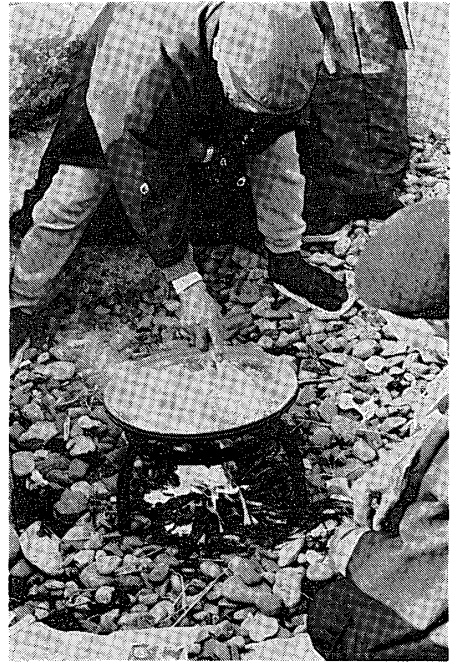


写真 5 イイ（神饌）を調える (→73頁)



写真 8 秋葉神社にて西の海に向かって舞う黒尉 (→76頁)

安 乗——翁祭り



写真 7 潮八合目に舞う (→74頁)

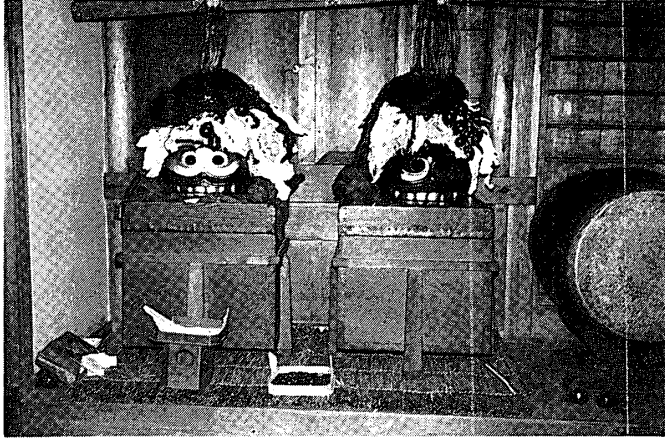


写真 10 左が権現神社の雌獅子，右が宇賀多神社の雄獅子（→76頁）

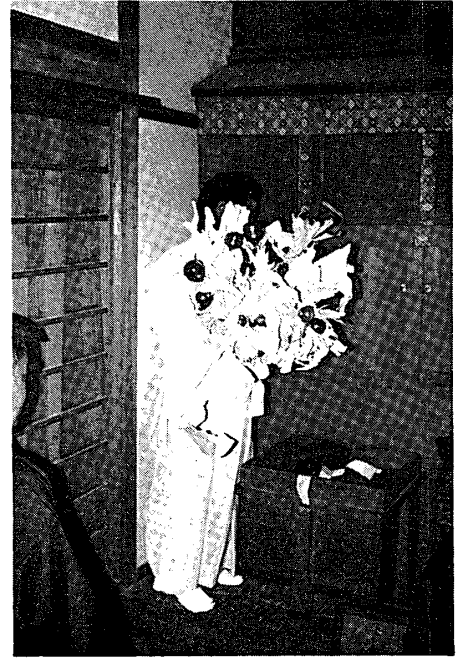


写真 9 鈴の音が闇に響いてオカシラムカエ（→76頁）

鶺 方——獅子舞



写真 12 クトウドリに導かれて（→78頁）



写真 11 「山さし音頭」をうたう宮籠りの若者（→76頁）

立
神——ヒッポロ神事(その一)

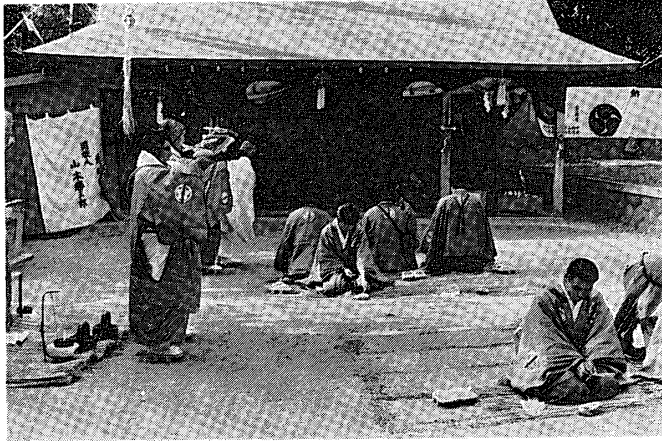


写真 13 座配にて神前へ御膳を供える。昭59
(→80頁)

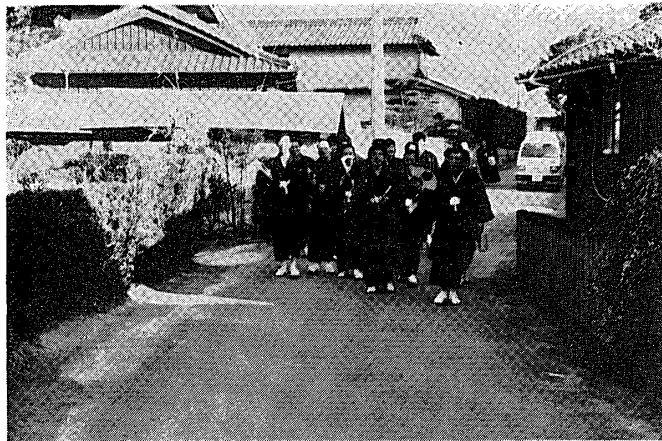


写真 14 伊勢音頭をうたいながら薬師堂から宇気
比神社へ向かうトリの若い衆。昭60
(→80頁)



写真 16 丸注連納め。昭59 (→81頁)

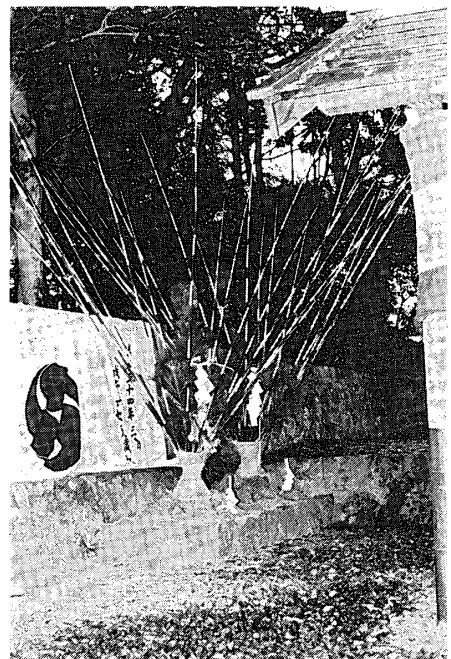


写真 15 丸注連。昭59 (→81頁)



写真 18 鳥ノ舞の間に宮司は宮中で神楽詞を唱える。中央奥が獅子殿。昭59(→82頁)

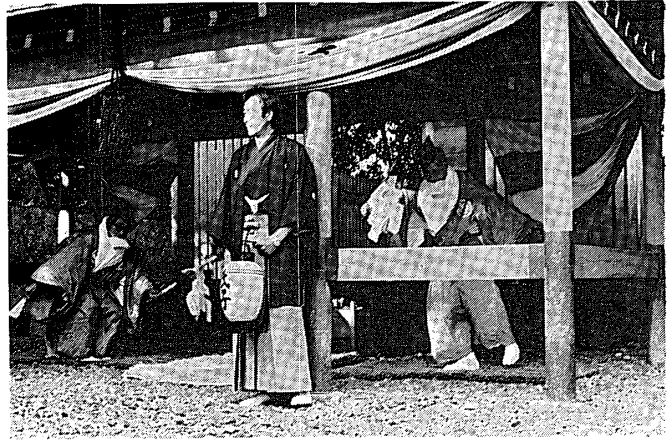


写真 17 鳥ノ舞。右が一ノ当, 左が二ノ当, 中央は若い衆の驚護役。この直後に若い衆がなだれ込んで来て舞いを邪魔する。昭59(→82頁)

立 神——ヒッポロ神事(その二)



写真 20 獅子舞。宮中へ戻る舞の時に小踊が交差する。昭60(→82頁)

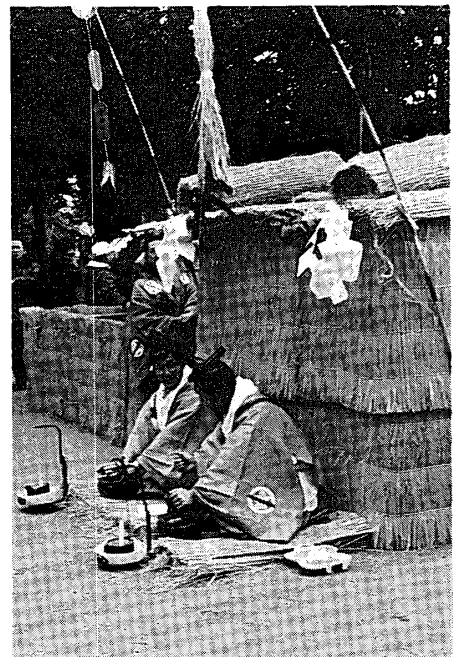


写真 19 鳥ノ舞を終えて所定の座に着く二人の当。小屋場には豊年竿が飾られ, その左手が酒場。昭60(→82頁)



写真 23 トリの若い衆が「持ターッセー」と叫ぶ。昭59 (→83頁)



写真 21 小踊。手に天狗面・扇を持ち、頭に冠・ウラジロ等を著けている。昭59 (→82頁)

立 神——ヒッポロ神事 (その三)



写真 24 杜氏がトリの若い衆に向かって「飲マターッセー」と叫ぶ。昭59 (→83頁)



写真 22 トリ場の豊年竿。昭59 (→82頁)

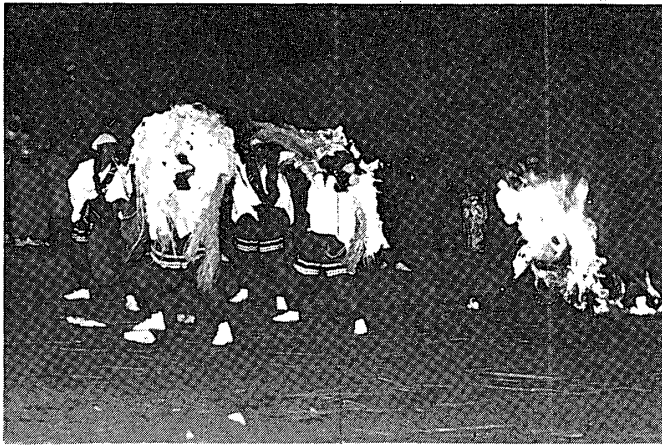


写真 28 宮中へ舞いながら帰る獅子。昭59
(→84頁)



写真 25 素襖着が「通ーリマセンナラ……飲マーッ
セー」と叫ぶ。昭59 (→83頁)

立
神——ヒッポロ神事(その四)



写真 26 豊年竿を跳び越えて火消しに向かうトリの
若い衆。昭59 (→84頁)

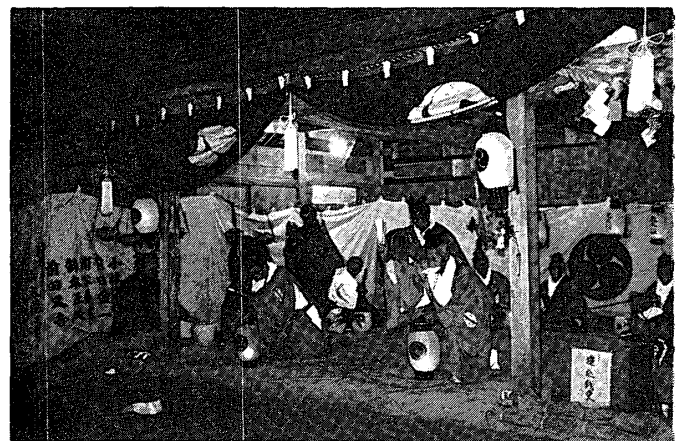


写真 27 宮中から獅子を招きかえす鳥ノ舞役。昭59
(→84頁)



写真 30 立石祭り。鳥居の手前が立石。昭60 (→85頁)



写真 29 トリ場での獅子の一舞い。昭59 (→84頁)

立 神——ヒッポロ神事 (その五)

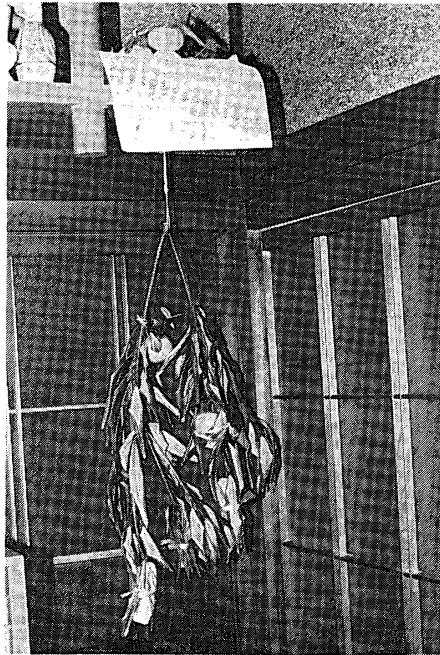


写真 32 田の神様に飾ったユズリの木。昭59 (→94頁)



写真 31 井戸神のツボキ。昭59 (→93頁)